

---

# 灯 ~ TOMOSIBI ~

翔っち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灯〜TOMOSIBI〜

### 【Nコード】

N3602G

### 【作者名】

翔うち

### 【あらすじ】

中学一年生の少女紗紀は、虐めに遭い、家出をしてしまった。家出先でも絡まれ、ピンチになったところをある少年に救われた。しかし彼の家には誰もいない。「俺はずっと独りだよ」そんな彼の正体は………発火人間！？二人が出会った時、既に運命の歯車が動き出していた。

激しく炎が燃え上がる。一軒の家が、赤色に揺れる火に包まれている。

「助けて下さい！まだ、まだ中に子供がいるんです！」

そう泣き叫ぶ一人の女性。隣でも泣き喚く幼い女の子。それと対応するように燃える家の中からする男の子の泣き声。集まって冷たい目で見守る野次馬。

その時、一人の背の高い男が家の中に飛び込んでいった。消防隊員の制止を振り切り、それは本当に一瞬の事だった。

しかし、その男が帰ってくる事は、二度と無かった……

もうこんな所嫌だ。毎日嫌な事ばかり。学校なんて、もう行きたくない。

夕日が沈みかけた路地を、紗紀はただ一人、寂しく歩いていった。右腕の傷を押さえながら涙を溢す。押さええている腕の辺りは、白いYシャツが赤く染まっている。制服は所々に血飛沫が付き、限界の脚は今にも倒れそうな震え方をしていた。それでも小さな体を倒させまいと、必死に踏ん張っている。横を買い物帰りの婦人が通る。紗紀を見て、何か言いたげだったが、そのまま背後に消えていった。小さな通りに入る。左に曲がってずっと沿って行けば家に着く。だが、その距離がとても遠く感じる。脚が思うように動かない。

学校で友達に、いや友達とは言えないあの卑劣な男女に、奴隷当然のように甚振られた。その140センチに満たない小さな体は、反抗など許しては貰えなかった。その甚振り方は、かなり酷いものだった。頭に浮かぶ度に体が震える。罵声とともに浴びせられる、暴力の連続。彼女の体は何度も悲鳴を上げていた。体を血に染め、ふらふらとよろける足を引き摺り学校を出ると、必死に家に向かっ

た。

家に着くと、電気が点いていた。中から母が料理をする音が聞こえた。最近母は新しいキッチンで腕を振るうのを楽しんでいる。気付かれないようにゆっくりとドアを開けた。同じように閉める時もゆっくりと閉める。しかし、

「あら、紗紀？帰ってきたのー？」

と気付いた母の声が聞こえた。

「う、うん」

早く部屋に行かなければ。こんな姿を見られたら、また・・・面倒になる。と、焦って靴を脱いでいると、リビングの逆側の部屋から父が出てきた。しまった・・・！！

「お帰り。ん？紗紀、何だその血と傷は？」

「あ、いや、これは・・・」

「ちよつと来なさい」

そう言つて父はリビングに入つて行つた。・・・最悪だ。そういえば、表に車があつた気がする。気付かなかつた。家になると仕方なくリビングに入った。リビングは落ち着いた雰囲気だった。しかし、一人父は背を向きながらテレビを消した。空気に気が付いた母は紗紀を見ると、

「あら、どうしたの、その怪我？大丈夫？今手当てしてあげるからね」

と言つてリビングの端にあるタンスを探り始めた。父は相変わらず物騒な顔をしたままテーブルの席に着き、紗紀にも座るように言つた。紗紀が座ると、話し始めた。

「また、学校で虐めに遭つたのか？」

「・・・うん・・・」

「何故逃げなかつた？」

「・・・だつて無理だもん・・・」

「助けを呼ばなかつたのか？」

「・・・」

「呼ぶ事も出来なかったのか？」

父の声が少し荒くなる。表情は変わらなかった。

「紗紀、答えるんだ」

「・・・・・・・・」

「答える、紗紀！」

「だって、どうせ呼んだって誰も来ないよ！」

紗紀の目からまた涙が出てきた。父がそのままの顔で黙る。母が救急箱を手に急いで紗紀の隣に座る。そして父の方を睨んだ。

「ちよつといきなり酷いでしょお父さん！」

「お前は黙っている。俺は紗紀と話しているんだ。紗紀、何があつたんだ？」

「・・・・・・・・」

父は少しいらいらしてきた。紗紀はただ鼻を嚙る。

「何をされたんだ。言え！」

「・・・・・・・・」

「こんなお父さんに、話す事なんて何も無い！」

「それだからお前は虐められるんだ！さっさと答える！」

「お父さん！」

母が叫んだ。救急箱から包帯を出した手を止める。

「何でそんな言い方するんですか。紗紀はこんなか弱い女の子なんですよ！可哀想だと想わないんですか？一番辛いのはこの子なんですよ！」

「そう言つと母は私に優しく囁いてくれた。」

「紗紀。お風呂でとりあえず体を流してきなさい。そうしないと手当ても出来ないから」

言われるまま紗紀は椅子を立つと、すつと廊下を出た。父の声が聞こえたが、母が口論しているのが聞こえてくる。

母はいつも、唯一の味方だ。何かある度に紗紀の身を守ってくれる。昔から母は紗紀の事だけは念を入れてきたのだ。それをいつも甘やかしだと言って敵になるのが父なのだ。自分で何も解決出来ない

いのは良くないと言いつつ、昔から説教をされる度に、私は母の元に縋り付いていく。そんな両親はいつも対立している。

部屋から服を取ると、浴室に向かった。服を脱ぐ時も、傷は痛んだ。体中から血が出ていた。浴室に入ると、少し冷たい空気が傷を刺激した。全てがこの体突きつけているような気がした。シャワーを出す。冷えた水は、すぐに温かいお湯になった。あつという間に湯気が立ち込めてきた。

「痛っ・・・！」

シャワーの水が沁みた。沁みるのを我慢して、傷を流す。呻き声が勝手に漏れる。その痛みとともに記憶が蘇ってくる。

あの時。帰る為に昇降口に降りると、突然同級生の男女八人に囲まれた。戸惑う紗紀をその内の男子二人が持ち上げて、女子一人が口を塞ぎ、体育館の裏まで運ばれた。体格差もあり抵抗できなかつた紗紀は、只でさえ暗く目立たない体育館裏の倉庫に運ばれ、更に奥の小部屋まで入れられた。鍵が掛けられ、密室状態となったその部屋は、どれだけ騒ごうが外には伝わらない。紗紀は手足を封じられ、そして・・・。

恐ろしい映像が頭の中に流れ、一瞬目を閉じた。息が荒くなる。床には真っ赤な血がぼたぼたと滴っていた。沁みるだけなので、浴槽には入らなかつた。浴室を出ると、まだ口論は続いていた。リビングの前で少し立ち止まつたが、引き返して自分の部屋へ入って行った。胸の奥がとても苦しかった。部屋に入ると、静かな空気だけが流れていた。鍵を掛けると、もう一度服を脱いだ。鏡を見た紗紀は、驚きの余り、その場にぺたんとして座り込んでしまった。それは、幼い少女の体に刻まれた無数の酷い傷。とても普通の日常ではつかないような、心を汚した傷だった。

もう、次は嫌だ。学校には行けない。・・・殺される。このままでは肉体も精神も持たない。私は、これ以上傷付きたくない。怖い。恐ろしい。そこで彼女の頭に一つの考えが浮かんだ。・・・逃げよう。この町から、現実から。誰も私を知らないような、ずっと遠く

へ。体が勝手に支度をしていた。服、上着を着て、財布をバッグにしまった。その他色々入れると、部屋を出て、リビングの前まで来て立ち止まる。こっそり覗くと、父はソファに座ってテレビを見ており、母はそのままテーブルに顔を伏せていた。泣いているようだった。

お母さん、ごめんね。

紗紀はさっとそこを通過すると、音を立てないように靴を履き、ドアをゆっくりと出た。そして、まだ夕日が沈んだばかりの夜の街を、ゆっくりと歩き出した。

バスの中は穏やかな空気が流れていて、少し気持ちが悪く落ち着いた。右の窓から見える景色はもう完全に夜だった。音楽プレイヤーからイヤホンで曲を聴いていたが、全く聞いている気がしなかった。前のお婆さん達が紗紀の傷を見て、ひそひそと何かを話していた。

小学生時代から虐めを受けてきた紗紀は、毎日母の元へ泣きながら帰って来た。最初は無視をされたり、誰も寄って来なかったりという程度だった。それはまだ、本などを読んでいれば良かったので、大人しい紗紀にとっては、一人でも苦しい事は無かった。授業では黙々と勉強をして、休み時間は読書する。

しかし、そんな紗紀の態度に腹が立った連中は、次第に虐めをエスカレートさせていった。朝に上履きが無いと思えば、紗紀の天敵である高い場所に隠してあったり、見つけたと思えばそれは無惨に破られていたり。更には紗紀の唯一の救いである本が、完全に跡形もなく燃やされていた事もあった。学校には行きたくないと思ったが、あの父が許してくれる筈も無かった。そして虐めは暴力に発展した。すれ違う度にさつと腹を殴られ、休み時間にはリンチを受けていた。しかも紗紀は勉強に真面目な分、頭が良かった。そこを妬ねたんだ奴等は、紗紀が良い点数を取る度放課後に彼女を捕まえては殴り続けた。そして点数を取ることが出来なくなった紗紀は、一気に

成績を落とした。そして父が怒り出すのだ。

中学に入ってもメンバーは同じ。毎日陰湿な嫌がらせを受け、身も心もぼろぼろだった。そして今日は二学期の期末テストの結果が返され、全て良い点数だった紗紀は見つかる前に早く帰宅しようとした。しかし、先生から紗紀の点数を聞いた連中等が紗紀を捕まえ、そして虐めに至る。体が小さい紗紀は、反抗など出来なかった。出来た事と言えば、こつこつ地道に点数を取って、成績を上げ戻す位だった。母は面談や保護者会でそれを必死に訴えていた。しかしこの学校でそんな事は無い、と学校や他の保護者は言い張り、受け入れて貰えなかった。

「お譲ちゃん、着いたよ。終点だよ」

気が付くとバスは駅に着いていた。他の乗客は既に降りており、若い運転手さんだけが目の前にいた。

「あ、すみません」

「もう暗いから気を付けるんだよ」

「有難うございます」

お金を払ってバスを出ると、駅の中に向かった。駅は仕事帰りの人で混雑していた。雪崩のように押し寄せてくる人達で、なかなか前に進めない。こういう所は危ないよと母がよく言っていた。やつとの事で切符売場に着いた。が・・・どこまでの切符を買おう？あまり近いとすぐに見つかる。しかし遠すぎるとお金が・・・。適当に六つ位先の切符を買った。改札を抜けると、ホームへの階段を下りていく。様々な思いが胸の中をよぎった。自分は本当にこれで良いのだろうか。ホームに降りると、次の電車の時間を確認した。もうすぐ来るらしい。地下のホームは静かだった。今にも後ろから誰かが襲って来そうな気がして、紗紀は再び不安になった。

大きな音を連れて、ついに電車がホームに来た。少しずつスピードを緩める電車を、紗紀はじっと見つめていた。車体が止まり、ドアが開く。ドアに入ろうとした紗紀は、不意に立ち止まった。何で私はここにいるんだろう？父の言葉が頭に流れてきた。

それだからお前は虐められるんだ。

いいじゃん。逃げたって良いじゃない。折角の逃げられるチャンスなんだから。今まではそんなチャンスすら無かった。ここまで来たらもう引き返せない。なのに、足が動かない。乗ろうとしない。下を向くと涙が出てきた。発車のベルが鳴った。

お母さん、本当にごめんなさい。今まで有難う。

紗紀は震える足を動かすと、急いで電車に飛び乗った。

電車の中は珍しく空いていた。紗紀は席の左端の方に座っていた。右には少し間を開けて老夫婦が一組話をしていた。紗紀の向かい側には音楽を聴いている少年が一人と、その反対側の端に若い女の人一人座っていた。電車は今、紗紀が乗ってから四つ目の駅に向かっている。窓の外を見る。もう自分の町の面影は残っていない。ただ電車の走る音と、老夫婦の話声だけが耳に入っていた。

次の駅に着き、ほっと気を気が楽になった気がした。ここまで来ればもう未練は無い。隣の老夫婦が降りて行った。と、入れ違いに一人の男が入って来た。かなり酔っているようだった。足をふらつかせている。ドアが閉まり、発車した。男はふらついて派手に倒れたが、誰一人反応しなかった。男は立ち上がると隣にいる少年に話しかけた。

「ようう、兄ちゃん。何聴いてんだあ？」

少年は聞こえていないのか、無視しているのか、目を閉じて音楽を聴いたまま動かない。男は一瞬嫌な顔をしたが、こっちを見て笑った。目が合ってしまった。男が寄って来る。

「おう、お譲ちゃん、なかなか可愛いじゃねえか」

男は横のスロープに右手で掴まり、前屈みになって紗紀の顔を覗いてきた。臭い酒のおいがした。紗紀は目を合わせないように、目を横に背けた。

「お譲ちゃんどこから来たんだ？あ？」

紗紀は黙って吹いてくる荒い息に耐えていた。

「へへ、可愛いなあ、本当に。どれ、おじちゃんが遊んでやるう」  
その時、男が急に紗紀の曝け出された膝かひに左手を置いてきた。ぴくりと反応をした紗紀の体は、男の欲を更に興奮させた。男はその手を前後に動かし始めた。紗紀の細く小さな体が震える。

「良い肌じゃねえかこりゃあ。へへっ」

「あ、やつ、やめて・・・」

紗紀の小さな声が漏れる。男はやめるどころか、その声で更に手のスピードを速める。そして、いきなりその手で紗紀の胸を突いた。紗紀は瞬間的にその手を振り払った。

「やつ、やめて下さい！」

男が一瞬驚いた顔で止まった。が、すぐに顔を不満に歪め、絡んできた。

「おい、何でそんな事すんだお譲ちゃん。折角おじちゃんが遊んでやってるんだぜえ？」

ああ、助けを求めなきゃ。紗紀はその時思った。でも、声が出ない。周りの人は見て見ぬ振り。虐めの場面が脳裏に浮かんた。このままだと・・・。体が恐怖で震えた。返事のない紗紀に、男は更に興奮して続けた。

「おい、聞いてんのか？大人をあんまり舐めるなよ」

怯える紗紀の肩に、男が両手を掛けた。体重を掛けられ、動けなくなってしまうた。紗紀の体に恐怖の電流が流れる。

「あ、あ・・・」

「あ、じゃねえぞコラ！」

男の右腕が振りかぶられた。紗紀は目をぐっと閉じて下を向いた。殴られる！

衝撃は来なかった。ふと紗紀が顔を上げると、さっきの音楽を聴いていた向こうの少年が、男の肘に自分の腕を引っ掛けて止めていた。

「おじさん、いい歳して何やってんだよ」

「んああ？」

男が標的を変え、振り向いて少年の胸倉を掴んだ。少し車内が騒がしくなった。しかし彼は動じず、男に向き合う。

「もうあんた、こんな女の子ナンパするような歳じゃないでしょ？」

「ああ？ガキい、もう一度言ってみろ！」

彼は紗紀の方を向いた。目を合わせると、目を横に流し、逃げるよう合図した。紗紀は立ち上がると、バッグを持って横に逃げた。

「待て、コラあ！」

その時後ろを向いた男が、紗紀を片手で押した。紗紀は高い声を上げて倒れてしまった。

「何してんだ！」

彼は彼女の前に回り込むと、一発男の頬を殴った。よろけて、すぐに男は立て直すと、

「生意気なガキが！」

と言って彼の両肩を掴み、思いつきり彼をドアに叩き付けた。明らかに体格では男の方が有利だ。更に彼の頬を仕返しとばかりに殴りまくる。紗紀の足元に、彼の口から出た血が飛んできた。そしてついに、彼はその場に座り込んでしまった。それでも彼は目つきを変えず、右手を男の方に翳した。男は止めという目で少年を蹴りに掛かった。

その時だった。突然男の上着が、一気に燃えだした。もがき出す男。周りの人が騒ぎだした。自然発火？聞いた事はあるけど、実際に見るのは初めてだ。イギリスではこれによる死亡の例が多いらしい。赤い炎が燃え上がる。

「熱い！熱い！あああああっ！」

騒ぎ出す男の前で、彼は上を向いて息を吐いていた。この騒ぎの中で、安心している。こちらの視線に気付くと、笑い返した。すると一方で、男の上着の炎が消えた。前触れは全く無かった。不自然にそれは消えた。しかしそれを機に、周りの人達が男を取り囲んだ。若いサラリーマンの男性二人が男を押さえ、さっき近くに座ってい

た女の人が警察に連絡していた。

それを目にも暮れずに少年はこっちに寄って来た。

「大丈夫だったかい？」

「う、うん……」

そんな筈は無かった。既に虐めによつて疲労を抱えていた脚が、いきなり痛み出した。

「あつ……！」

「あ！やっぱり怪我したか。大丈夫？……あつ！」

更に彼は気付いてしまった。彼女の体にある無数の傷に。

「そ、それ……」

「ち、違うの」

「？」

彼は困惑の顔をした。

「これは違うの……」

彼も下を向いて、それ以上は聞いてこなかった。電車内に次の駅に着く知らせが流れた。男はまだ、困んだ人達の中でうるさく騒いでいた。

次の駅で降りた紗紀は、彼や他の乗客数人と一緒に、事務所まで連れて来られた。男はすぐに痴漢容疑で逮捕された。軽い質問を幾つかされ、家の事は適当に答えて、すぐに終わった。しかし、まだ紗紀の体の震えは止まっていなかった。立っているのが辛く、椅子に座っていた。すると肩に手を置かれた。一瞬びっくりして振り返ると、さっきの少年だった。頬に青い痣あざができていた。

「あ、ごめん。大丈夫だった？その傷……」

「あ、これは古傷だから、大丈夫。本当有難う」

「うん……」

彼は不安そうな顔をした。当たり前だ。この傷は今日、数時間前に付けられたものだ。古傷に見えるはずが無い。治療をしていない

ので、まだ痛む。特に脚は、先程の衝撃で長時間立つことも出来ない。ここまでの女の人に支えられてもらった。二人はまだ事務所の中にいた。外は少し寒くなっているが、事務所は暖かった。他の人もまだある程度残っている。すると、事務所の事務員の一人が紗紀に話しかけてきた。

「君、大丈夫だったかい？何なら出た所にタクシーがあるから、付いて行って、送ってあげるよ？」

「あ、いや、良いです」

「そうかい？家はここから遠い？どこら辺？」

「あ、それは……」

答えられない。答えたら、ここまで来た意味が無い。それに、今はとても大人が怖かった。でも、適当に答えて変な所に行ってしまったら……。

「どうした？」

「あの、えつと……」

「どうすれば……」

「あ、大丈夫ですよ」

紗紀は驚いて振り返った。声の主は彼だった。

「彼女は俺が送りますから」

「君は大丈夫かい？」

「あ、俺門限とか無いんで。ちゃんと送りますから、心配しないで下さい」

彼は紗紀の様子を見て何か気付いたのか、そう言った。

「そうか。お譲ちゃんもそれで大丈夫かい？」

「あ、はい……」

「うん。じゃあ君、よろしく頼んだぞ」

そう言って事務員は奥の部屋に入って行った。紗紀が彼の方を向くと、彼もこちらを向いた。

「あっ、有難う」

「いや、何か事情があるみたいだからね」

彼は少し笑った。弾けるような、さわやかな笑顔だった。よく見ると彼はなかなか優しそうな笑顔の似合う顔だった。彼は何故か信じる事が出来た。何となく目が、見たことがあるような、優しさを漂わせていた。それは母の目に似ていた。そして、紗紀より背が20センチ位高い。もちろん彼が高いのではなく、紗紀が小さい。しかし彼は、何か普通の子と違う。

「でも、本当に家は？」

彼は、紗紀のポケットからはみ出ている切符を取った。彼女は反応できず、ただ彼を見上げた。

「あ、次の駅までか。じゃあちょうど良いや。俺もそこまでなんだ。もう電車も無くなっちゃうから、もう行こうか。あ、歩ける？」

「うん・・・」

本当の事は言えなかった。でも、事情まで分かってくれる位なら、この人になら、話せるかも知れない。彼女はそう感じた。ゆっくりと立ち上がる。

「あっ」

小さく叫んだのは彼だった。紗紀の膝がぐくりと折れ、彼女の体が沈んだ。

彼の背中にぴったりと体が張り付く。彼は私を背負いながら、駅の外に出た。冷たい風が吹く。私の脚は既に限界だった。あの時、脚の力が全て抜けてしまい、全く立てなくなってしまった。そして彼は私を背負ってここまで来てくれた。駅を出た彼の足が止まる。

「で、えーと・・・家の方向は？」

「・・・実は」

「実は？」

「・・・家出してきちゃったの」

「えっ？」

彼が振り向いた。この状態で彼が振り向くと、かなり顔が近い状態になった。慌てて彼が前に向き直す。紗紀も少し顔を赤くした。

「そっか……」

「……」

「何かあったの？」

「え、あの……」

「あ、ごめん。無理して言わなくても良いよ」

「うん、大丈夫。……実は、虐めに遭って」

彼の表情が変わった。かなり驚愕おどろの顔をしている。バスが一台前を通った。

「虐め？じゃあ、その体の傷ってまさか……」

「うん。今日されたの……」

「今日？やっぱり……それで今家出てきたのか。古傷って言うのは嘘だったんだね」

「ごめん……」

「良いよ。悪いのは君じゃない。それにしても、何て酷い事を……」

彼は本当に悔しそうにしてくれた。

「心配してくれて有難う」

「え？いや……」

彼はちよつと可愛い照れ笑いを見せた。

「……うちに来る？」

えっ、と紗紀は声を漏らした。心の奥でどきつとした。少し固まっていた。

「どうしたの？」

「あつ、別に……ただ男の人の家に泊まったことが無いから」

「ああ、なるほど」

彼は少し上を向いて考えると、まあ大丈夫だよ、と言って歩き出した。空を見上げる。この町は星が綺麗だった。星がよく見える。

そして建ち並ぶ建物の雰囲気は、都会でもなく、田舎でもない、何

か心が和む感じの町だった。彼も星空を見て笑っていた。

「そういえば、名前言ってなかったね」

「ん？ああ、そうだね。忘れてた。俺は三城由雅、みぎゆうが年は十三」

「私は木風紗紀。きかぜ 同い年だよ。よろしくね」

「よろしく」

彼は握手の代わりに微笑んだ。彼女もふつと笑った。

「家に着いたら、今度は俺の事情を教えるよ」

「由雅君の？」

「そう。多分びっくりするよ」

びっくりと言えばあの時起きた、突然の炎もびっくりだ。あれは一体何だったんだろう。疑問と期待を胸にして、二人は彼の家に向かった。

彼のアパートに着いた。アパートという割には、古い感じがしなかった。一階の一番端の105号室に「三城」というプレートが付いていた。電気は点いていない。彼は鍵を開けると、中に入った。

「まあ狭いけど、ここが俺の家」

彼が明かりを点けた。そこは八、九畳位の一室があるだけだった。右側にベランダがあり、奥に小さなキッチンがある。その両サイドのドアは、多分お風呂とトイレだ。普通のローテーブルとテレビを中心に家具が置いてある。

狭いという割には、空間が広い。というより、どこか寂しい気がする。何も無いような雰囲気。家具が少なく、気付いた事は写真が無い。紗紀はまさかと思いつつも、由雅に訊ねた。

「ねえ、由雅君・・・」

「ん？・・・気付いた？」

彼は紗紀を下ろすと答えた。その言葉で紗紀は確信してしまった。その目を彼は見た。

「・・・そうだよ。紗紀ちゃんの思う通りだ」

「じゃあ、由雅君って・・・」

紗紀がか細い声で訊く。彼は目を閉じてから、息を吐いて言った。「そう、俺には家族がいないんだ。俺は、今までずっと独りだよ・・・」

紗紀は何故か、胸が急に苦しくなってきた。同時に頭の中で混乱が生じる。

「な、何で？どうして？」

「そ、それを今から説明してあげるから」

紗紀の心の中は既にパニック状態だった。自分が家出をしているという状況すら忘れている。由雅が正面に座ると、とりあえず彼の目をじつと見た。

「さ、紗紀ちゃん、それは恥ずかしいって・・・」

少し顔を赤くして、由雅が言った。肩を掴むと、由雅が紗紀の方を向いた。

「だって、一人で寂しくないの？」

「そりゃあ、寂しい時もあるよ。でも、それが現実なんだ」

由雅は紗紀を落ち着かせながら話し始めた。

「俺は、実は昔、もつと離れた所に住んでたんだ。そこで三才の時、家で火事があつて、みんな焼け死んじゃったんだ。母さんも、父さんも、妹も。唯一助かったのは、俺だけだった。俺だけが助かった理由・・・それは、俺が火事の原因だったんだ」

「由雅君が、火事の理由？火遊びとか？」

少し紗紀は落ち着いた。彼は首を横に振った。

「そういう行動とかじゃなくて、俺自身なんだ」

「え？どういうこと？」

彼は右手の人差し指を立ててみせた。

「つまり、こういうことだよ」

ポツと音を立てて火が点いた。それも彼の指の先に。赤い小さな火が。

「きゃっ！え、え？どうなってるの？」

「要するに俺は、パイロキネシスト発火能力者なんだ」

「な、何それ？」

彼はくすつと笑った。そして火がぱつと消えた。

「どう？漫画の世界みたいだろ？実は世界にはこういう不思議な人間の例が幾つかあって、つまりは俺もその例の中の一つだったんだ。パイロキネシストは、普段は何も無いけど、感情が乱れた時に自分の周りのどこかにで火が点くんのだ。だから、危ないからそういう人は殺されちゃうんだ。しかもパイロキネシストは火に強くなる。つまり、その火事は俺が起こしたものだ。俺は警察に保護されて、パイロキネシストって気付かれるまでは養子として育てられた。そして小学三年生の時に、パイロキネシストって事がばれちゃったんだ」

「え？何で生きてるの？」

「すぐには殺されなかつたんだ」

「どうして？」

「俺は小三の時点で、その時既に、この能力を使いこなしていたんだ。これは異例中の異例な事だった。そこで政府でこの議論が話し合いされたんだ。そして、議決されたのは、延期。使いこなせるなら安全だろう、って。ある一定期間そのことで問題を起こさなければ、そのまま日常生活を送れる。逆に起こせば、その瞬間死刑が下される。俺はそれならって思った。でも、甘かった。俺の能力を知った友達が、関わらないように避けてきた。それがきつかった。日に日にストレスが溜まって、ついに四年の時に感情が爆発して、学校が火事になった。そして、政府から追われる身になった。俺が殺されるのを避けたい義母は、俺をただ一人、地方へ送った。そして今まで孤独に逃げて来て、ちよつと落ち着いた。ここは微妙な所だからな」

紗紀は下を向いていた。もうだいたいぶ空気に慣れていた。

「能力者って、良い事しか浮かばないけど、凄く辛いんだね」

「でも、良い事も沢山あるよ。例えば、光熱費が安くなる。あと、

さつきみたいに人を助けたい時にも使える。コントロールが出来るから、相手が辛くなったらやめれば良いんだ」

「じゃあ、あの時いきなり燃えだしたのは」

「そういうこと」

ははつと彼が声を上げた。

「あの、それって限界量とか、代償とか無いの？」

「残念ながら、ある。全快の時でも、全力で燃やし続けて三時間が限界。でも、使わない時に勝手に溜まっていくから、いつも半分以上は残るかな……。代償は、体力、スタミナ。つまり自分の運動エネルギーなんだ。だから仮に限界まで使ったら、もう立てない位だから使う時は、体力と残り能力のバランスが大切なんだ」

「へえー。大変だね」

まあね、と答えて由雅は笑った。外の風とは真逆の、静かな笑い方だった。

と、その瞬間、ぎゅるぎゅると何かの音がした。

「あっ……」

「ああ、紗紀ちゃんお腹空いた？」

「い、いや、そんな……」

紗紀は顔を赤くして慌てて答えた。しかし、音は止まらなかった。再び腹は鳴った。真っ赤な顔をして「違う」と繰り返す紗紀を見て、由雅は思わず笑ってしまった。

「無理しなくていいよ。ここは誰もいないから」

「うん……」

それでも、やはり同じ年代の男子の前では、恥ずかしさを隠せないようだった。

「さて、何にしよう？」

「あ、料理なら手伝うよ」

「うん、ありがと」

立ち上がると、二人で狭い台所に立ち、料理を始めた。由雅の手際の良さを見て、紗紀は驚いた。こんなに料理が上手い同い年の人

は、一人もいない。むしろ紗紀も上手い方ではあるが、比べ物にならない位由雅の手付きは良かった。二人で作った料理は、美味しそうな湯気を立てていた。一口食べた紗紀は固まった。

「・・・・・・・・」

「ん？味変だった？」

「え？いや、凄く美味しいから」

「そう？ああ、良かった」

彼の笑顔は本当に、ただ純粹に嬉しそうだった。紗紀はその顔をじつと見詰めてしまった。お腹が空いていた二人は、一つ残さず食べ切った。食器を片してから、彼は風呂を沸かした。もちろん、彼の能力で。入ろうとして、風呂場のドアの前まで行った彼は、何か気付いたように振り向いた。

「あ、そういえば、紗紀ちゃんお風呂は？」

普通に訊いてくる由雅に、少し戸惑った。

「あ、私はもう入ったから」

「そっか。分かった」

そう言っただけで彼はドアの向こうに消えた。

普通、初めて会った女の子に「お風呂は？」なんて訊くの？・・・実は由雅君って鈍感？でも、さつき見詰めていた時には恥ずかしいって言っただけ・・・。まだ彼の事はよく分からない。改めて紗紀は部屋を見渡した。妙にすっきりし過ぎた寂しい空間。そして外では常に政府に命を狙われる毎日。こんな環境で彼はずっと生きてきたのだろうか。彼の生活と、自分の生活。どちらの方が辛いだろうか。

十分前後で彼は出てきた。肩に掛かるタオルで髪を拭いている。「お待たせ」と言っただけで笑顔を見せた。彼は真ん中のテーブルを移動させると、布団を二組敷いた。時計を見ると、もう十時頃だった。目線を窓に移した。お母さん、何してるかな・・・心配してるかな・・・・・・・・

「ちゃん、紗紀ちゃん？」

「・・・え？」

「どうしたの？ポケーっとして」

「あ、いや、何でもないよ」

慌てて返事をして、片方の布団に潜った。由雅ももう片方の布団に入った。彼はリモコンで明かりを消した。窓から入ってくる月明かりで、部屋はぼんやり明るかった。

窓を揺らす風の音だけが聞こえる。紗紀はちらりと由雅の方を見た。彼はもう静かに寝息を立てていた。こうして布団に入ってから色々な不安が頭に浮かんできた。今この布団に入っている状態で、部屋には彼と二人だけ。何かされないかな。同年代の男の子と二人きりなんて、何をされるか分からない。でも、由雅君なら大丈夫かな・・・？いや、でもそれが引っかけかも知れない。まだ起きているかも知れない。不安が募る中、睡魔が襲ってきた。しかし、紗紀は寝まいと必死に目を開けていた。心の中で、彼の優しい目が浮かんできた。不安と信頼が、紗紀の中でぶつかり合っていた。

朝の陽射しが窓から入ってくる。紗紀は目を覚まし、上体を起こした。眩しい光が目射す。横を見ると、由雅はまだ寝ていた。時計が七時半を回っているのを見て、一瞬紗紀は慌てた。が、すぐに状況を判断した。昨日の出来事を頭の中で整理する。

「あ、そっか・・・別に早起しなくても良いんだ」

そのまま紗紀はふらふらと立ち上がって、トイレに向かった。出てくると、由雅が起きていた。彼は眠そうな目を擦りながらこっちを向いた。

「ああ、紗紀ちゃんお早う」

「うん、お早う」

「・・・何？」

「え？・・・いや、朝は何するの？」

由雅は布団から出ながら答える。

「何って、普通に起きて、ご飯作って……」

「そうなんだ。普通だね」

「この辺は安全だからね」

紗紀の考えを読んだらしい。紗紀もその答えに納得した。この辺は意外とそうでもなさそうだが、田舎らしい。

「とりあえず布団畳んでおくから、寝癖直してきなよ」

「えっ？」

紗紀は自分の頭を押さえた。女の子にしては少し短めの髪が、凄く跳ねているのが分かった。急いで洗面台に行った。鏡を見ながら置いてあった櫛で髪を整えた。柔らかい髪は、すぐに元に戻っている。最後に鏡で自分の表情を見た。目の下が少し青い。いつもより沢山寝た筈なのに……洗面台に櫛を置いてドアを開くと、もう布団を畳み終えた由雅が、朝食を作り始めていた。

「あつ、私も作るよ」

「いいよ、あんまり眠れてないでしょ？昨日ずっとうなされてたよ」「え？本当？」

そうだったんだ。確かに気分は良い方ではない……というより、もしかして昨日の何かされたらどうしよう、って事でうなされていたのかも知れない。

「まあもうすぐ出来るから、そこに座ってなよ」

「うん……」

机の前にぺたんと座り込む。南東側に位置するこの部屋は、朝の陽射しだけで十分明るかった。じっとしていると、眠気が襲ってくる。

「はい、出来たよ」

はっと夢の世界の入口から引き戻される。ご飯を食べ始めると、食欲で目が覚めてきた。一生懸命食べる紗紀を見て、由雅が笑った。「紗紀ちゃんって意外とよく食べるね」

紗紀は顔を赤らめてむせた。いつもはこんなに食べない。それ程、美味しいのだ。

「今日はちよつと行きたい所があるんだけど、良いかな？」

彼は唐突に話しかけてきた。紗紀は手を止めて、返事をした。

「行きたい所？別に私は良いよ」

「分かった。じゃあ食べて、少し休憩したらね」

そう言つて彼はおかずを一口食べた。

外は冷えていた。冷たい風が傷を刺激する。秋も終わりに近付いたこの時期、気温は一気に下がっていく。周りは民家と畑。時々コンビニやパン屋など。そんな道を、紗紀と由雅は歩いていった。

「あの、由雅君」

軽トラが横を走り過ぎていった時、紗紀は突然訊ねた。

「何？」

「こんな普通に外をふらつと歩いてて大丈夫なの？」

「この辺なら大丈夫」

そう言つて笑う由雅の横顔に、思わず紗紀は見惚れてしまった。

全くの他人なのに、信頼出来るような気がした。そこでもう一つ質問をした。

「ところで、どこに行くの？」

「ああ、紗紀ちゃんの服と薬を取りに」

「へ？ふ、服？」

さつと自分の体を手で確認する。着ているのは、シャツと膝までのズボンと、上着位だ。しかも傷から出た血が少し滲にじんでいる。

「その服も血が付いちちゃったし、第一に全部一着しか無いでしょ？」

「う、うんまあ・・・」

「大丈夫。今から行く所、服売ってるから」

彼は暗い顔を見せない。もしかしたら、仲間が出来たから喜んでいるのかも知れない。今までどれ位の間、一人ぼっちだったのだろう。その後十分位歩くと、小さな仕立て屋に着いた。中に入ると、沢山の服が売られていた。その中を由雅はすすると進むと、躊躇ちゆうちゆう

無くレジの裏の扉を開けた。

「ゆ、由雅君、そんな所勝手に……」

「梶野さん」

そう由雅は呼んでいた。すると、一人の若い男性が出てきた。多分、二十歳位だ。

「よう、由雅。よく来たな。あれ？この可愛い子ちゃんは誰？」

「ああ、ちよつと事情有りの子で、その事で来たんだ」

「あ、あの、由雅君の知り合い？」

振り返った由雅は笑っていた。

「そう。命の恩人」

「梶野亮介だ。よろしくな。で、事情つて何だ？」

由雅が事情を話すと、梶野は快く受け入れてくれた。

「なるほど、虐めねえ……そりゃ酷いもんだ。まあ分かった。服とか薬とかは用意してやるよ。もちろん無料<sup>ただ</sup>でな」

「本当？梶野さんありがとう」

「まあ良いって事よ。ここにあるのから好きなの選んどいて。後はいつも通り頼むぞ。帰りに薬買ってくるから」

「はいはい」

そしてドアの向こうから鞆<sup>かばん</sup>を取ると、梶野は店を出ていった。紗紀は固まっていた。状況が理解出来ていない。

「え？いつも通りって？出ていつちやったけど」

「ああ、大学行ったの。それで、俺ここで働かせてもらってんの」

「え？働く？」

「そう。流石にお金が無いと生活出来ないだろ？だからここで働いてんの」

由雅が濃い赤のエプロンを付けながら言う。

「あの、それであの梶野さんって誰？」

「ああ、今、えっ……と二十一の大学生で、この町に逃げてきた時に助けてくれたんだ。俺の能力を知ってなおね」

「優しい人だね」

「ああ、あの人がいなかったら、俺はもう死んでたよ」

毎日虐められて傷を負ってきた自分と、毎日命を狙われてひたすら逃げてきた彼。もしかしたら、結構似た者同士なのかも知れない。だからこそ、信頼出来るのかも知れない。

「ま、とりあえず服選んだら？女子のは向こう側にあるよ」

「うん、ありがとう」

何か恥ずかしくて、さっとそつちに向かった。少し顔が熱い。この気持ちは、一体何だろう。信頼というより、むしろ

首を振って、気持ちを落ち着かせた。とにかく今は服選びに熱中する事にした。

・・・ 一時間後、まだ紗紀は服を選べていなかった。気になった由雅がやってきた。

「あれ、まだ選べてないの？良いのが無かった？」

「いや、良いのは沢山あるんだけど、何かちょっと、好きなものをタダでっていうのに戸惑っちゃって」

「ああ、気にしなくて良いよ。本当に好きな選んでいいから。試着室もそこにあるよ」

じゃあと行って、良いと思ったのを適当に持って試着室に行った。忘れずにカーテンから顔を出して言った。

「由雅君覗かないでね」

「覗かないよ」

肩を揺らして彼は笑った。ちょっとだけ彼の笑顔を見詰めてから、カーテンを閉めた。客が来たのか、由雅の親切そうな声が聞こえた。頑張ってるんだな、由雅君。

その後何着か試着して、気に入ったものを選んだ。上から下まで好きなものを選ぶと、かなりの量になってしまった。

「・・・こないっぱい大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。というよりほとんど手作りだから、そんなに選んでくれたか、って喜んでくれるよ」

レジの隣の机に置いた大量の服を見て、由雅が言う。隣で立って

いる紗紀は、下を向いた。すると、自分の手と由雅の手が、とても近い。紗紀は少し赤くなった。手をするすると彼の方に近付ける。手が由雅の左手と体の間にきた。鼓動が一気に高まる。少し息が荒くなった。それに気付いた由雅が、こっちを向いた。

「紗紀ちゃん？」

そう呼ばれた時、緊張が爆発した。噴火した感情の余り、目を瞑ると同時に彼の手をきゅっと握ってしまった。「えっ」と驚いた彼は、一瞬手を引こうとしたが、そのまま止め、こっちを見た。一気に汗が噴き出してきた。呼吸もだんだん苦しくなってきた。緊張で何も出来ずに、ただただ彼の手を握りしめる。由雅の方にふらつと体が揺れた。それを彼が支えた。もう我慢できなかった。

正面に回って彼の肩に両手を置くと、精一杯踵かかとと顔を上げた。

身長差があり過ぎた。紗紀のキスは由雅の口元まで届かず、そのまま足の力が抜けて座り込んでしまった。慌てて由雅が支える。

「さ、紗紀ちゃん大丈夫？」

足の疲労がまだ取れていなかった。何も出来ず、そのまま紗紀は由雅の胸元に寄り掛かった。動揺していたが、由雅はとりあえず、紗紀を隣の和室に運んで寝かせた。彼が用意してくれた布団に横になると、すぐに紗紀の記憶は途絶えた

紗紀が目を覚めたのは、午後三時だった。額に冷たいものが乗った。ああ、冷えピタか。

「あ、起きた？」

隣には、まだ手が紗紀の上にある由雅が座っていた。その後ろにも薬を持った梶野が立っていた。その薬を、由雅が受け取る。

「じゃあ由雅、そっち任せたぞ」

「あ、はい」

そう言っつて梶野は店の方に戻っていった。由雅が視線を紗紀に戻す。

「大丈夫だった？ここ最近の疲労が溜まってたみたいだね」

「あれ？私……」

ゆっくり上体を起こす。彼が背中を支えてくれた。

「びっくりしたよ。倒れたと思ったら、熱が38度9分もあるから熱あるな」って、自分で気付かなかった？」

「いや、あんまり……」

あの時はそれどころじゃなかった。もう頭が真っ白で、その時の感覚も憶えていない。すると、由雅が手を首の方に伸ばしてきた。触れられた瞬間、ぴくつと震えてしまった。ちよつと驚いた由雅は、反射的に引いてしまった手で、もう一度触れ直した。

「……熱はまだあるな」

彼はすつと手を引くと、薬の錠剤を一つ取り出した。そして水と一緒に渡してきた。

「これ解熱剤だから」

「うん、有難う」

錠剤を飲むと、一つ息を吐いた。そして、すぐに気まずい空気になってしまった。私は顔を更に赤くし、彼もそわそわしていた。何で私、あんな事したんだろう。キスをしようとして、届かずに倒れた自分の姿が目に見えた。あんなの、恥ずかし過ぎる。また呼吸が荒くなり、両手で顔を覆った。更に、一瞬寒気がして体を震わせた。それに由雅が反応し、布団を掛け直してくれた。私はまた横になる。その時に目が合い、紗紀は思わずドキツとした。

「あ、あ、あの……」

言いたい。話したい。なのに、口が動いてくれない。

「……俺は、良いよ」

「えっ？」

私は思わず聞き直した。彼が少し上に視線を泳がした。

「その、何て言うか、紗紀ちゃんが……あれ、と、届かなかったじゃん？だけど、俺はさ、えつと、その、届いても、良かったよ」  
私はその一言で緊張が解けたのか、爆発したのか、固まってしま

った。由雅も顔を赤くして、自ら頬を軽く叩いていた。私は上体を起こすと、彼の手を引つ張った。

「おっと。さ、紗紀ちゃん？」

「私も」

そう言つて、少し前屈みになつた彼の背中に腕を回した。そして目を瞑つて、大接近の彼に唇を合わせた。時間が、少しの間

止まった気がした。それ以外、何も感じない。何も聞こえない。すると彼の腕も、躊躇いながらもゆっくりと紗紀の背中を上り始めた。その瞬間、ドアが開く音がした。由雅が慌てて一旦顔を離し、振り向いた。梶野がのんびりとした動作で入ってきた。手には大きい二つの紙袋を持つていた。

「これ、選んでもらつた服な。ここ置いておくから、帰り持つてくんだぞ」

「あ、有難う」

「ん？」

梶野は、二人が赤い顔で息を乱しているのを見て、様子を窺<sup>うかが</sup>つた。焦つた紗紀は、思いつ切り噎<sup>む</sup>せてしまった。

「どうした？何かあつたのか？二人とも息荒いぞ」

「い、いや何でもないよ」

「じゃあ何でお前は肩抱いてんだ？まさか由雅、そんな可愛い女の子だからって変な事してねえだろな？」

「し、してないよ！」

「あつそ。じゃあ良いけど、病人は優しく見てやれよ」

梶野はまた店に戻つていった。ドアが完全に閉まると、由雅が溜息を吐いた。

「ああ、危なかつた」

「ご、ごめん由雅君・・・いきなりあんな事して・・・」

「いや、謝る事じゃないよ」

動こうとすると、足の方でパキツと音が鳴った。同時に紗紀が足首を押さえる。

「痛っ……」

「あつ、大丈夫？ちよつと診せて」

彼が布団の下の方を捲ると、左足首が少し腫れ上がった状態だった。今にも素手で折れそうな位細い紗紀の脚は、痛みを堪えて震えている。彼の手が触れると、体に電流が走った。

「これは痛い。もしかしたら疲労骨折かもな。今から病院行った方がいいかも……」

「でも、大丈夫なの？」

「へ？……ああ、俺は大丈夫だよ」

彼は私に上着を着せて背負うと、ドアを開けて店に出た。梶野がそれに気付いてやってきた。由雅が足を見ると、それに気付いて驚いていた。

「疲労骨折みたいなんだ。今から病院連れてく」

「分かった。あんまり遅くなるなよ」

そうして彼は私と一緒に外に出た。やや西に傾いた夕日は、昨日の帰り道を連想させ、ちよつと恐かった。視界に入らないよう、私は目を閉じて彼の首にもたれ掛かった。しかし、まぶた瞼のずっと奥で、その赤い夕日の残像がゆらゆらとぼやけていた。

彼の家までの帰り道、私は彼の背中で眠ってしまっていた。荷物も彼が持っているというのに、自分の体まで任せてしまっている。でも結局、足は疲労骨折だった。歩けはしない。

しかし、夢の中でお、彼の温もりが背中から伝わってきた。信頼、優しさ、愛情……。夢の中で、彼の心の中が見えた気がした。彼はただ一人何も無い所で、途方に暮れていた。後ろから声を掛けると、驚いた表情で振り返った。そして由雅は笑みを溢すと、そのまま紗紀の方へ歩いてきた。しかし紗紀は金縛りなのか、動けない。彼は目の前まで来ると、見上げる紗紀の顔に、自分の顔を近付ける

その瞬間、現実に戻ってきてしまった。また紗紀は布団の中にいた。ゆっくり辺りを見渡した。そこは由雅の部屋だった。しかも彼は横で寝てしまっていた。彼の様子から、看病をしてくれている時に、疲れて寝てしまっただけ。紗紀は彼の体を少し引き寄せると、自分の布団の一部を彼に掛けた。そして自分も彼に近付くと、彼の腕の中で再び眠りについた。

初めて会った夜から三日が経った。もう彼との生活にも慣れてきた。というより、足が使えない為にほとんど彼がやってくれている。

「そういえば」

紗紀はふと思った事を訊ねた。

「由雅君で、中学の勉強とか分かるの？」

彼は食器を洗いながら答えた。

「ああ、勉強は梶野さんに教えてもらってるよ」

「やっぱり・・・そうなるか・・・」

「どの位の範囲まで？」

「いや、中学の勉強はもう終わった。今は高二のところ。自分のペースで出来るから、どんどん先に進められるんだ」

「早いねー」

確かに、学校は全員が覚えられるように同じ範囲を繰り返す。しかし、この場合は一人なので自分が覚えられれば良いのだ。

ふと、テレビから聞き慣れた名前が流れた気がした。紗紀はそっちに振り向く。そして、驚愕した。紗紀の顔写真が出ていた。

「名前は木風紗紀。近くの中学校に通っていた一年生でしたが、三日前から忽然と自宅から姿を消し、現在行方不明となっています。」

当日彼女は

「それに気付いたのか、由雅も急いで作業を終えてきた。」

「紗紀ちゃん・・・これ」

「う、うん・・・」

何も言えない。何と言ったらいいのか、分からない。すると、紗紀の母が映った。かなり泣いていた。

「あ、お母さん！」

その姿を見て、紗紀は目を潤ませた。母は紗紀を心配してくれていた。あの唯一心を開ける優しい目からは、大量の涙が溢れていた。それを見た由雅が口を開いた。

「ねえ紗紀ちゃん。やっぱり、お母さん心配してるし、戻った方が」

「駄目なの」

紗紀は由雅の言葉を遮った。

「確かに、お母さんは心配してくれてる。でも、お父さんは絶対嫌「お父さん？」

もう紗紀の涙は我慢の限界だった。

「虐めだけじゃないの……お父さんは、私に対して凄く酷くて、だから、お母さんには悪いけど、絶対に帰れない」

下を向いて泣き出す。由雅はテレビのスイッチを切ると、そつと紗紀の小さな体を抱き締めた。紗紀はその胸元に蹲る。

「もう嫌だよ……私もう、苦しいのは嫌だよ……」

「紗紀ちゃん……」

執拗に追って来る、悪魔の手。その指は逃げ続ける紗紀に、確実に近付いている。もう失う物が無い。あとは、自分という存在だけでも、自分を失うという事は

「……私、もう生きられない」

その言葉に、由雅が過敏に反応した。

「駄目だ！そんな事言っちゃ！」

「もう無理だよ……」

「俺が守るから」

紗紀は顔を上げた。自分を抱いてくれている彼は、強く、真剣な目をしていた。

「俺は今まで何年も、絶望の中で生き延びてきたんだ。絶対に、死なせない」

その言葉に紗紀は思いつ切り泣き出した。由雅がさつきよりも少し強く抱き締めた。

「それに俺、今決めたから。今までずっと、何も目的も無く、ただ逃げ続けるだけの日々だった。でも、今は違う。紗紀は大切な人だから・・・俺初めて、人を好きになれたんだ。キスなんてのも、した事無かった。だから・・・」

由雅も目を閉じた。

「絶対、命を懸けても君を守る」

紗紀は心の奥が痺れるような衝動に打たれた。

絶対、命に懸けても

「約束するよ」

「有難う・・・有難う・・・」

紗紀も彼に抱き付いた。そして彼女が顔を上げると、紗紀の潤んだ弱々しい目と、由雅の強い決意を秘めた目が、お互いを捉えていた。そして、顔をゆっくり近付ける。

最初のよりも、もっと長いキスだった。二人はその状態で動かない。動くのは、高い鼓動を鳴らす二つの心臓のみ。時計の秒針が一周しても、二人はそのままだった。

背中を抱いているその腕から、ぴつたりと張り付いているその胸から、座っているその二つの脚から、合わせているその口元から・・・彼の優しさと温もりが沁み込んできた。

由雅君

その時、ドアからノックの音がした・・・

窓からは、昼にも関わらず曇天で暗い空が窺えた。その男は椅子に座りながらそんな空を眺めている。ノックの音がした。

「入りなさい」

部屋の扉が開き、一人の部下が入ってきた。頭を一度下げると、机の前まで歩いてきた。

「ついに、動き出しました」

「ほう、やっとか」

男は椅子から立ち上がった。ついに、この時がやってきたか。振り返し、立ったまま机の上のパソコンを起動した。数回、キーボードを叩く。すると、ある人物のデータがすぐに出てきた。

三城由雅。 やつと君を見付けたぞ。この数年、探し続けていた甲斐があつた。今度こそ、君を……。

「奴は今？」

「現在、木風紗紀と逃走中。ここまで計画通りです」

「そうか。そのまま計画通り、行動しろ」

「はっ」

部下は部屋を出ると同時に、机の上にあるプレートを見た。そこに並んでいる文字。

「対発火能力者駆除組織 P E P 日本支部取締本部長 江東秀信えとうひでのぶ」

二人は暗い路地裏に逃げ込んだ。短いトンネルに入り、由雅は息を切らしながら抱き上げていた紗紀を下ろした。

「くそっ、何で、あの場所が分かつたんだ……」

「アパートの人があのニュース見て通報したのかも」

「まさか、こんな事になるとは……」

由雅は壁に凭もたれてシャツの胸の辺りを握り締めた。逃げ切る為に多量の火を使い、紗紀を背負って走り、彼の体は悲鳴を上げていた。息が全く整わない。

「だ、大丈夫由雅君？ごめんね、私が足手まといになっちゃって……  
「いいよ……そんな事、気にすんなって……」

由雅は話す事も辛い状況だった。ふと彼女に視線を落とす。彼女も少し怯えた表情をしていた。こんなか弱い女の子が、こんな状況で落ち着いていられる訳が無い。その時、彼女のシャツの隙間から、背中せなかの肌が見えた。それを見た由雅は、顔を驚愕に染めた。

「まさか……」

紗紀がその不自然な目に気付いたのか、顔に焦りを表した。

「ゆ、由雅君？」

その声で我に返る。さつと目を逸らした。

「な、何でもないよ」

まさか、紗紀は……？いや、そんな事はない筈だ。でも、もしかしたら……

「まずいな」

「え？」

突然の言葉に、紗紀が聞き返す。やっと息が整ってきた由雅は、話し始めた。

「さつき警察が俺の正体に気付いてただろ？このままだと、警察とPEPピーブに追われる。俺も、紗紀も」

「PEPって何？」

「Pyrokinesis Extremate Project、対発火能力者駆除組織だ。通称PEP。パイロキネシストを今まで取り締まってきた、自衛隊直結の世界政府組織だ」

「まさか、私は警察に、由雅君はPEPに追われるって事？」

「そういう事だ。只でさえ辛いのに、二つのグループから追われるんじゃあ、逃げ切るのは相当辛い。まあ殺されるのは、俺だけなんだけどな」

「そんな……」

紗紀の表情が不安に染まっていく。由雅はそんな紗紀を、ただ見詰める事しか出来なかった。

畜生……何だよ。何でこんなに俺は弱いんだよ。絶対守るって、約束したばっかなのに！

「あつ、いた！」

その声に、二人は顔を上げた。トンネルの右側から、自転車に乗った人が走ってくる。

「くっ、次々と来やがって！」

由雅はその人物に向けて掌を広げた。それに気付いたのか、その人は身を震わせた。

「消える・・・！」

「待って由雅君！」

紗紀の声に、由雅は出しかけた炎を消した。

「何で、何でだよ紗紀ちゃん」

「あの人は、知ってる」

「え？」

その人はトンネル前で自転車を降り、こっちに歩み寄ってきた。

紗紀が由雅の後ろへ回り、由雅は手に力が入った。

「古井君・・・」

「あっ、木凧」

古井という少年は駆け寄ろうとして、足を止めた。由雅が、彼を睨みつけているからだ。

「お前誰だ」

「落ち着いて由雅君！学校の同級生だよ」

「学校の？虐めを受けてたんじゃないのか？」

「そ、そうだけど・・・」

古井は視線を由雅に向けた。

「よう。お前が火を使う危険人物とかいう奴か？」

「だから何だ」

「さっさと木凧を解放してやれよ、誘拐犯」

「何だと！」

「由雅君やめて！古井君も、そんな事言わないで！」

紗紀の、脚を掴む力が強くなった。動けない由雅にまた一步、古井は近付く。

「その火を使つて脅したんだろ？どうせ」

「するか！お前だつて紗紀ちゃんの事を虐めてたんじゃねーか！それ以上近付くな！」

由雅の拳が火に包まれた。一瞬古井は驚いたが、すぐに顔を戻し

た。

「へえ、ほんとに燃えるんだな。しかしそれで殴るつもりか？暴力行為で罪重くなるぞ」

「どうせ捕まったら殺されんだ。そんなの関係無い」

「お願い、やめて二人とも・・・」

トンネルの上を重量トラックが走った。地響きが伝わってくる。

「おいおい、本気で殴る気かよ。でも火を使ったら木皿まで巻き添えだぜ」

「そんな事はない。ほんとにそれ以上近付いてみる。火傷するぞ」

「ははっ、そんな事・・・」

その瞬間、古井の体は後ろへ吹っ飛んだ。そして転がり、頬を押さえる。

「だから、それ以上近付くなっって言っただ」

殴った拳を広げながら、由雅は息を乱した。紗紀の手を優しく振り払い、古井に近付くと、胸倉を掴んだ。彼の頬にはもう火傷の痕があった。

「お前は何しに来たんだ！言え！」

黙る彼を、由雅はもう一回殴った。しかし、今度は火は使っていない。彼の口から出た血が、辺りに飛び散る。

「わ、分かった・・・言う、言うから」

由雅は彼を解放し、一歩下がった。古井が上体を起こし、息を吐く。

「お、俺はこの辺りをうるついでたのは、たまたまだよ。でも、携帯のワンセグで、行方不明の木皿がこの辺で見付かったって聞いて探しにきたんだ。何か変な能力者が誘拐とか言ってる、でもそういう訳でもなさそうだな」

「ああ」

後ろを振り返る。紗紀が髪を掻き分けながらこっちを見ていた。そして、暫く沈黙が続いた。

「なあ」

その沈黙を破ったのは由雅だった。

「何で彼女を虐めてたんだ？」

その質問に、古井は下を向いた。逆に紗紀は顔を上げた。

「わ、分かんねえんだ」

「分かんねえってどういう事だよ。もう一発殴るぞ」

「待ってくれ！ほ、本当の事なんだ」

紗紀もこつちに近寄ってきた。由雅が支えようと、彼は少しずつ話し始めた。

「いつからか覚えてないけど・・・突然クラスの一人がこう言ったんだ。『木尻を全員で甚振るぞ』ってな。でも、元々そいつはそんな事するような奴じゃなかった。何でそんな事するんだ、って理由を聞いたら、『あいつを虐めるだけで、一生楽出来るような大金が手に入るんだぜ』って言ってた」

「大金？」

「ああ。何でも、協力した奴全員にその金が入るって言うんだ。俺は最初不安だった。その事を親とか先生に聞いたら、『あら、そうなの』位しか言わなかった。そのうち、虐めてる連中が『やらないとお前も殺されるぞ』って圧力掛けてきて、本当は信じてなかったけど、その時にはほぼ学年全体が参加してて様子もおかしかったから、もしかしたら本当に殺されるんじゃないかって・・・」

「それで参加したのか」

「ああ。俺は本当はこんな事やりたくなかった。でも・・・」

妙な話だ。ある女の子を虐めて、大金が入る？それも、一生楽出来る金額？参加しないと殺される？

「古井君、もう良いよ。私はそれが分かれば、納得するよ」

「木尻、本当にごめん！本当に、ごめん・・・」

「古井君が謝る事じゃないよ。だから泣かないで」

彼の泣き声だけがトンネル内に響く。その中で、由雅は必死にその謎を考えていた。すると、古井がはっと顔を上げた。そして後ろを向いた。

「どうした？」

「お前等、逃げる」

「え？」

「警察だ。こっちに向かっている」

耳を澄ますと、確かに遠くでパトカーの音がした。まだこっちの居場所は掴んでいないらしい。

「今のうちに早く逃げる！」

「ああ！紗紀ちゃん、行こう！」

「あ、うん！」

彼女を背負うと、古井が最後に話し掛けてきた。

「捕まんなよ」

「ああ。ありがとな」

そして由雅は走り出した。紗紀はその背中で、彼に手を振っていた。走り出すと、黒い雲から小さな雩しゆくが降ってきた。

凄まじいどしゃ降りになってしまった。由雅は紗紀を背負いながらその冷たい雨の中を走り抜けていく。紗紀が身をぶるっと震わせた。

「寒い？」

「う、うん。でも大丈夫」

早く見付けないと。その時、数メートル前に白い小型車が見えた。そこから人影が降りてくる。

「梶野さん！」

「由雅！こっちだ！」

梶野が後部座席のドアを開けると、由雅はまず紗紀を乗せ、反対側から彼も乗った。梶野も運転席に乗り、ドアを閉める。

「お前等無事で良かったよ。ニュース見たら、二人が追っ手から逃げてるってなってたからな。電話してきた時は正直驚いたぜ」

「梶野さんも、こんな仕事に大丈夫でしたか？」

「紗紀ちゃん、心配すんな。俺はお前等がピンチの時は、地球の反対側でも駆け付けてやるぜ」

彼はそう言いながら二人にタオルを渡し、エンジンを掛けた。

「とりあえず店うちに行こう。話はそれからだ。着替えもしなくちゃならないしな」

車が走り出すと同時に、紗紀が可愛げにくしゃみをした。その仕事に思わず笑ってしまった。

信号で止まる度に、二人の緊張が高まる。しかも一回、目の前をパトカーが走り去っていった。

「大丈夫だ。自然にしてる」

梶野のその声を聞いても、二人の心は落ち着かなかった。店に着いた時は、本当にほっとした。

中に入ると、奥の部屋に誘導してもらった。

「風呂沸いてるから、順番に入っとけ。服は適当に用意しておくから」

「梶野さん有難う」

そう言って二人はびしょ濡れの靴を脱ぎ捨てた。

紗紀が髪を拭きながら風呂場から出てくると、まだ髪から水したたを滴らしている由雅がこっちを向いた。

「ごめん由雅君、お待たせ。入っていいよ」

「ああ・・・随分早かったね。ちゃんと温まった？」

「うん、大丈夫だよ」

「そう。なら良いけど」

由雅はそう言いながら風呂場に入っていった。静かな和室に、一人ぼっちになる。

こっそりとドアを半分開け、店の様子を窺った。特にこれといった変化は無い。

「お、やっぱり服のサイズ合ってたな」

梶野が二つ飲み物を運びながら言ってきた。

「あ、有難うございます・・・」

「ほれ、これ温かい飲み物、つつつてもただのお茶だけど。二人で飲んでくれ」

「あ、はい」

そう答えて二つの湯気が出たマグカップを受け取る。すると、お茶の温かさがじわりと手に伝わってきた。

「まあ多分ここで大人しくしてりゃあ大丈夫だろ」

梶野はまた店の方に戻っていった。部屋の中央にある小さい机に片方を置くと、残った方を両手で持って飲み始めた。お茶の良い香りが体に溶け込んでくる。

由雅もなかなか落ち着かなかったのか、いつもより早く出てきた。目が合った紗紀に、無理に笑い掛ける。

「由雅君・・・」

彼は黙っていた。きつと、自分に責任を感じているんだ。私を巻き込んだじゃったとか、そう思ってるんだ。

「あ、これ、梶野さんが飲んでって」

「え・・・ああ、有難う」

彼はお茶を受け取っても、なかなか口を付けなかった。紗紀も、掛ける言葉が見付からなかった。二人とも、自分がどうしていいのか分からない。

そんなこんなで結局夜になってしまった。戻る事は出来ず、私と彼は梶野さんの家に泊まる事になった。今日は初めてのあの夜以来、あまり眠れなかった。

起きた時、何故か私は体がほんわか温かかった。それもその筈、私は彼の腕の中にいた。驚いて、少し硬直していた。

「ゆ、由雅君？」

由雅は苦しそうに顔を歪めながら、紗紀を抱き締めていた。

今回は紗紀が入ったのではない。由雅が、抱いているのだ。彼は魔うなされているようだった。

「う……紗紀ちゃん……」

「由雅君、大丈夫？起きて。朝だよ？」

由雅の目がゆっくりと開いた。彼は二回瞬きをすると、状態に気が付きはつと身を反応させ、紗紀の体を解放させた。

「あ……ご、ごめん」

「いや、大丈夫……」

彼は上体を起こし、何故か少し赤い顔を軽く振った。しかし、今日はすぐに布団から出ず、ぼんやりとしていた。少しそれが心配になった紗紀は声を掛けた。

「由雅君、大丈夫？」

彼は我に返り、こっちに振り向いた。

「ああ、平気だよ」

「何か、魔うなされてたよ」

「え？」

由雅は驚いた顔を見せ、暫く考えてから、笑い掛けてきた。

「ちよつと、変な夢を見ただけだよ」

「夢？」

返事をせず、重そうに立ち上がった由雅は、洗面台へと歩いていった。その背中が、いつもと様子が違う。

紗紀はとりあえず体を起こした。そして、昨日の悪夢が少しずつ蘇ってきた。拳銃を構えながら追って来る警察官。紗紀の鼓動と重なるように音が大きくなり、近付いてくるパトカー。その度に体力を削って火柱を立てる由雅。彼があんなに激しく火を使うところは初めて見た。息を切らし、それでも頭を使い逃げ道を考える彼に、申し訳無い気持ちでいっぱいだった。私がいなければ、負担は軽くなっていたのに。それより、あのアパートに行かなければ彼がこんな事にはならなかったのに。そう考えると涙が零こぼれてきた。

私の所せい為で、私が

「紗紀ちゃん？」

由雅が慌てて駆け寄ってきた。また彼に心配を掛けてしまう。しかし、これ位しか言葉が出てこなかった。

「大丈夫だよ。ちよつと欠伸あくびが出ただけだから」

「でも……」

そう。こんなに欠伸で涙が出るのはおかしい。由雅もすぐに欠伸ではないと分かった。彼の表情が沈む。それでも無理に笑みを作つて返した。

「さつ、早く布団上げて着替えて……」

浮かんできた事だけをとりあえず口にし、行動し始めた。由雅が布団を片付けている間に朝食を作り始めると、眠そうな梶野が二階から降りてきた。

「おつ、朝から良い匂いすると思ったら、紗紀ちゃんの手料理かい。こりゃ楽しみだな」

「あ、いえ、そんな期待しないで下さい。由雅君の方が上手いので」

「俺はこんな可愛い女の子が作ってくれてくれるっただけで幸せだ。なあ、由雅？」

「え？ああ、うん」

いきなり振られた由雅は何となく答えていた。作った料理を三人で平らげると、由雅が梶野に質問を投げかけた。

「梶野さん、大学は？時間ももう無いけど」

「ああ、休んだよ。お前等がこんな状況なのに、置いていけねえよ。俺はお前の保護者だから」

「有難う」

そう言つて由雅は笑った。

「あと、今日は働かなくて良いから、家の中で大人しくしてる。どうやらこの辺も警察が嗅ぎ付けてる。あんまり騒がないようにな」

「うん」

そして軽い準備をして、梶野は店に出ていった。数秒後、がらがらとシャッターの開く音がした。

「はぁ・・・俺、梶野さんに迷惑掛け過ぎだな・・・」

答えられなかった。事実こうなったのは自分の所為なのだ。

「あと、紗紀ちゃんにもね」

私は驚いて由雅を見た。彼はまさかそんな反応をするとは思ってなかったのか、少し目を見開いた。

「いや、私謝ってもらおうような事されてないよ？むしる謝らなきゃならないのは私で・・・」

「そんな事はない。悪いのは俺だよ」

彼は急に深刻な顔になった。

「だって、もしかしたら」

その時、突然ドアが開いた。梶野が少し慌てた態度で言った。

「お前等、二階に上がれ！今すぐ」

「ど、どうしたの？」

「警察だ。一軒一軒聞き込みしてる。もうこっちにも来る。声が聞こえたら大変だから、二階で大人しくしてろ」

「分かった」

早速由雅は紗紀を背負い、二階に上がる。二階も、広さは同じ位の和室だった。下と違うのは、台所や風呂場が無い程度だ。紗紀を下ろし、由雅は階段の脇から下の様子を窺っていた。

「由雅君、危ないよ？」

「大丈夫かな・・・」

その時、紗紀は重大な事を思い出した。思わず口を押さえる。それを見た由雅がすつと寄つて来た。

「どうしたの紗紀ちゃん？」

「靴・・・」

由雅も気付いた。同時に階段の方を振り返る。

二人の履いてきた靴が、まだ玄関にある。着ていた服位なら、ここが仕立て屋なので怪しまれはしない。しかし、靴はどうだろう。

一人しか働いていないのに三つ、それもサイズのバラバラな靴が置いてあつたらどうだろう。完全に怪しまれるだろう。三人はパニッ

クで、靴の事など気が回らなかったのだ。

「まずいかも知れないな」

そう深刻に考えていた由雅の表情が、こつちを見た瞬間に安堵の溜息を吐いた。えっ、と反射的に紗紀は自分の体中を確認する。

「えっ、何？」

「後ろ後ろ。見てみ」

「後ろ？」

言われるがままに振り返る。すると、二人の靴はそこにあっただ。新聞紙の上に揃って置いてあり、隣にストーブが置いてある。きつと梶野は昨日の夜、一つしかない二人の靴を乾かそうとしてくれたのだ。さつきとても眠そうだったのは、乾かす為に使うストーブの管理で遅くまで起きていたからなのかも知れない。

「良かった。入れておいてくれたんだ、梶野さん」

安心した矢先だった。下でドアが開く音がした。それも、かなり強い音。二人は気になり、恐る恐る様子を窺った。一瞬理解出来なかった。突然ドアの向こうから梶野が後ろ向きに吹っ飛んできた。思わず目を疑った。ドアの向こうから、少し変わった背広の男が二人入ってきた。その瞬間、由雅が体を震わせた。表情が豹変ひょうへんしている。

「三城由雅と、木尻紗紀だな」

彼等が突然こつちを向いて言った。その正体に気付いた時、紗紀は背筋が凍るような恐怖感を覚えた。もちろん、由雅は見た瞬間から気付いていた。彼等の妙な服の胸元には「PEP」と書かれていた。彼等はまだ人間ではないような、冷たい目をしていた。

「君達を確保する」

「由雅！逃げろ！」

梶野はそう叫ぶと、前の二人に思いつ切り腹部を蹴られた。ついに、階段の下まで来てしまった。それでも彼は彼等二人を止めようと体を張った。

紗紀の頭に、嫌な記憶が蘇る。あの、冷酷な眼差し。虐めを受け

ていた映像が目の前に映る。抵抗どころか、逃げる事も動く事も出来ない。体中を縛られ、殴られ、弄ばれ、言葉でも傷付けられ、冷たいプールにそのまま放り込まれる。蹴り続けられて山の斜面を転がる。もう頭が真っ白どころか消えていきそうな位。

「早く行け！」

「紗紀ちゃん！」

二人の声ではっとした。しかし、鼓動はかなり速い。由雅は急いで靴を履き、窓を開けた。紗紀も慌てて靴を履く。もう完全に靴は乾いていた。

「紗紀ちゃんこっち！」

「え、窓から出るの！」

「ここしか無い！梶野さんが止めているうちに！」

梶野はもともとボクシングをやっていた事があり、それなりに体は強い。しかし、PEPの奴等は全員がそんな感じだ。長くは持たない。

由雅が先に窓の外の屋根に下り、手を差し伸べてきた。紗紀も一生懸命出ようとする。ちょうど彼女の両足が外に出て、後は少し下の由雅に向かって飛び降りるだけだった。

「がっ……」

突然銃声が耳に響いた。後ろを振り返った。

「梶野……さん？」

「まさか……」

その音に由雅も表情が一変した。しかし一瞬だけだった。すぐにキッと顔を変えた。

「紗紀ちゃん早く！」

その声に、慌てて飛び降りた。紗紀を支えた由雅は斜めの屋根で安定出来ず、すぐ横の歩道に落ちた。紗紀は痛みがあったが由雅の上に乗っていた為、何とも無かった。しかし、由雅は……

「由雅君！」

「ぐっ……」

彼は痛がったが怯む事無く立ち上がり、紗紀を背負った。そしてすぐに走りだす。

「由雅君、肩から血が・・・」

「今は喋るな！」

彼は歯を食い縛り、息を乱して走り出す。もう彼も乱心状態だ。

恐らくさっきの銃声は・・・梶野が、撃たれた。二人の為に、犠牲になつて・・・

「か、梶野さんが・・・」

「生きてる！生きてるから、今は黙ってる！」

そう怒鳴る彼の目からは、一筋の涙が流れていた。そして後ろからは、恐怖の足音が追つて来る。紗紀は死に物狂いで由雅にしがみ付く。目をぎゅっと閉じ、全てを彼に乗せる。途端に彼が後ろを振り向いた。そして、十人はいる追つ手に掌を向けた。轟音とともに、道全体を塞ぐ巨大な火柱が上がった。彼等の足は止めたが、由雅は走り続ける。そんな彼に、紗紀は涙を溢した。そして、彼の体の異変に気付いた。

足がふらついている。彼は昨日、火を使つてもこんなに早く足がふらつく事は無かった。そして、背中から伝わってくる熱。明らかに高熱を出している。朝起きてすぐ、気付いてあげるべきだった。顔が赤いのも、足がふらつくのも、納得する。恐らく、昨日の雨に打たれた事が原因だ。そして、大きな心の傷。感情を殺し、苦しみに耐え、動けない少女を背負い、そのダメージの合計は計り知れない。

彼はそれでも走る事をやめない。もうPEPの連中は撒いた。確かに安全とは言い切れないが、彼の状態からして休まないと今度は体が持たない。紗紀がこう言うのも当然だった。

「お願い。由雅君、止まって」

「駄目だ。こんな所で止まったら捕まる！」

「もう、由雅君の体が限界になつちゃうよ」

「限界位いくらでも超えてやる。絶対逃げ切る」

紗紀のか細い声は由雅に届かない。もう苦しむ彼を見たくなかった。見てるのが辛い。お願い、お願いだから自分を大事にして！  
紗紀は泣きながら由雅に抱き付いていた。

あるビルの下に、一台のベンツが停まった。ビルの扉から出てきた江東は、部下を連れて車に乗り込んだ。

「どうだい？彼等の行動は。私の予想通りだろう」

「その通りです」

「一人、犠牲が出ましたが」

「犠牲？」

助手席の部下に後ろから訊ねる。

「はい、名前は梶野亮介。彼等が隠れていた店で働く、二十一歳の大学生です。一応病院に運んでおり、命に別状はありません」

「そうか」

江東は窓の外に目をやった。そして不敵に笑う。

「その程度の犠牲は構わん。あの少年を捕まえる事が最優先だ」

なるほど、協力者がいたか。だからこの数年間逃げ続けられたという事か。しかし、君にはもう駒が無い。重いお荷物を背負っているだけなのだよ。それを君はまだ分かっていないようだ。

「さあ、どこまで逃げられるかな？」

江東の頭に、由雅の苦しむ姿が浮かんだ。

暗い裏道に逃げ込んだ二人は、一旦そこで身を隠す事にした。紗紀を下ろし、由雅はぐったりと座り込んだ。紗紀がすぐに近寄り、息を切らす彼の額に手を当てた。風で冷えた手はひやりとしていて、気持ち良かった。

「由雅君、すごい熱……」

由雅は返事すら出来ず、ただ首を横に振った。

「ここも、あまり長くはいられないな……」

「由雅君はここで待ってて。私が何か買ってくるから……」

「駄目だ！」

必死に彼女の手を取った。彼女は心配そうな顔で振り向いた。息が出来ず、言葉が出ない。

「何で？このままじゃ熱が上がっちゃうよ」

彼女は焦った様子で言った。

「行っちゃ、駄目だ……」

紗紀を引き寄せる。彼女は抵抗せずに由雅の隣に座った。

「もし見つかったら、その足じゃ逃げられない。それに、脅して俺の居場所を探ってくるかも知れない。言えば俺が殺される。言わなければ、紗紀ちゃんが……」

「でも、これじゃあ本当に由雅君の体が持たないよ！」

「強がるなよ」

彼女の上半身を抱き寄せた。回した手を、そのまま頬に移す。

「ちよっ、由雅君？」

「紗紀ちゃんも微熱があるだろ」

「紗紀がはつと目を見開いた。そして由雅を見上げてくる。」

「分かってたの……？」

「当たり前だよ」

「いつから？」

「起きた瞬間」

「紗紀はそのままの体勢で何度も瞬きを繰り返した。その頭を優しく撫でる。」

もう、これ以上彼女を危ない目に遭わせられない。だから、本当は連れて行かずに、安全な場所に避難させたい。でも今は、そんな場所なんて無い。しかし、俺と一緒にいれば命の危険がある。何も……何も出来ないのか！

「くそっ……」

悔しい。こんなに弱くて何も出来ない自分が憎い。人を守る事の

難しさを、屈辱的に味わされた。

「えっ……」

突然隣の紗紀が驚いた。よく見ると、携帯で情報を集めていたようだが……

「何があつたの？」

「お、お父さんが……」

怯えた表情でこつちを振り向いた。

「お父さんが、自殺した、って……」

「えっ？」

紗紀の父親、高峰尚一たかみねしやういちが亡くなった。リビングで、ナイフを刺した腹から血を流して倒れていたらしい。

紗紀が物心付いた時には、もう尚一が父親だった。母の木風紗江きふうさえは、紗紀が二歳の時に前の夫と離婚し、三歳になった翌年に再婚したらしい。尚一は昔からよく働く人で、近所での評判もなかなか良かった。何事にも全力で、いわゆる、一途に頑張る人だったのだ。

しかし、一つだけ問題があつた。何故か、彼は紗紀との接触を何かと拒むのだ。そして人一倍厳しい。紗紀は小学生になってからそれが辛くなり、ちょうどその頃から虐めも起きたのだ。その後テレビのニュースやドラマを見て、再婚者の子供は嫌がられるものなのだ、紗紀は気付いた。更に彼は、紗紀と紗江に自分の名字を使わせなかった。それからというもの、紗紀は友達にも父親にも不満を持つようになった。そして、唯一優しくしてくれる母だけを頼りに、ここまで生きてきたのだ。

紗紀は困惑していた。喜ぶ事なのか、悲しむ事なのか、分からない。ただ、押し寄せる不安に、心が締め付けられる。

「紗紀ちゃん……」

「何で……？」

このニュースでは、詳しい情報は入ってきていない。ただ確かな

のは、尚一が何らかの理由で自殺を図り、それは確実に成功したものである。

紗紀があわあわと口を動かしていると、由雅が口を開いた。

「紗紀ちゃん、もう帰った方が良いんじゃない？」

その言葉に彼を振り返る。とても心配しているのが分かる、母と同じ目だった。

「帰る・・・？」

「うん。家に帰れなかったのは、その父親の所為なんだろう？ だったら、帰った方が良い。お母さんも心配してる。俺といたら、確実に危ない」

「で、でも・・・由雅君は・・・？」

「紗紀ちゃんを送ってから・・・」

そのまま黙り込んでしまった。紗紀の表情が失望に変わっていく。それを見た由雅が慌てて慰めた。

「だ、大丈夫だよ。俺は今まで逃げ続けてきた訳だし、そんな心配しなくても平気だよ」

「・・・辛く、ないの？」

「こんなのいつも」

「違うよ！」

由雅が僅かに身を引いた。目から、雫がぼろぼろと零れてきた。

「私は・・・由雅君と離れるのが辛いんだよ・・・」

「えっ・・・さ、紗紀ちゃん」

紗紀は抱き付いた。シャツの上から涙が沁み込んでくる。

「だって、由雅君の事大好きだし、私を助けてくれたし」

「それは違う」

由雅はそこで紗紀の言葉を遮った。

「俺は、君を巻き込んでしまったんだ・・・」

拳を握り締めながら呟く。

二人は、余りにも弱い。まだ、たった十三歳の、それも一人は大きな爆弾を抱えた子供だ。体中怪我で負傷をし、恐怖心で心もぼろ

ぼろになっている。

「いたぞ！」

その声に二人の心臓は高い鼓動を上げる。二人が振り向くと、PEPの隊員が三人こっちに向かいながら叫んでいた。一人はこちらに拳銃を向け、説得している。

由雅は呼吸の整わない体を無理に動かした。前の紗紀をそのまま抱き上げ、ふらふらと立ち上がる。

「由雅君、もう・・・」

「諦めない！絶対、俺は諦めない」

隊員との間を火の海にすると、再び走り出した。しかしもう逃げ道はほとんど無い。敵に会う度に進路を変え、足も気力はほぼ残っていない。建物の間を抜けようとした時、ついに由雅の膝が沈んだ。それでも怪我をさせまいと、彼は紗紀を丁寧<sup>ていねい</sup>に下ろした。しかしすぐに、後ろから魔の影が追ってきた。

「くそっ・・・まだ、まだなのに・・・」

長い影が二人に掛かった。後ろにはもうPEPが追いついていた。さつきより増え、数人がこちらに銃を向け、一歩ずつ迫ってくる。

もう駄目かも知れない。そう思った時だった。耳元で囁かれた言葉に、由雅は耳を疑った。

彼が驚いた顔でこちらに振り向く。紗紀は体を震わしながら彼の目をじっと見詰めていた。彼女の目に、今にも落ちそうな涙が溜まっている。

「ちょ、ちょっと待って」

「そんな事より、早く逃げて」

弱々しく細い声しか出ない。彼に抱き上げられ、走った訳ではないので疲労がある訳ではない。なのに、言葉が上手く出せない。この時、彼女自身気付かない程、相当な恐怖心が体を蝕<sup>ほじく</sup>んでいた。

「このままじゃ私が足手纏<sup>また</sup>いになって、由雅君が殺されちゃうよ・・・

「・・・」

「でも、それじゃ・・・」

そこで由雅が黙り込んだ。紗紀は由雅の手をぎゅっと握り締めていた。

その時、異様な空気が右から流れてきた。彼はそつちにさつと顔を向けた。同時に、今までに見た事が無いような怖い顔をした。彼の睨み付けているその視線の先を辿ると、妙な雰囲気を感じた一人の男が立っていた。男は二人を、いや、確実に由雅の方を見下し、嘲笑あざわらっていた。由雅の表情にはもういつもの優しさは無く、凄まじい殺気に満ちていた。

「江東・・・」

「おやおや。久し振りの再会で、そんな怖い顔をして・・・それに、目上の人には『さん』を付けないと駄目ですね」

江東はふつと笑い、こつちに歩み寄ってきた。その一步が近付く程、紗紀は背筋が凍るのを感じた。痙攣けいれんする手で、精一杯由雅の手を握っていた。

「そんな荷物抱えて、本当大変ですね・・・ま、同情はしませんかね」

「てめえなんか同情されたら反吐へんが出んだよ」

由雅は紗紀が握っていない方の手をぐっと握り、堪えていた。もう、声が怒りに震えている。その時、由雅の前にさつと移動した。

「お願い・・・もう逃げて・・・」

呟くような、小さな声。しかし、超近距離の由雅にはしつかり聞こえていた。

「いや、俺は」

「駄目！」

彼の両腕を掴む。彼は振り払おうとはしなかった。

「私は捕まっても生きていられる。でも、由雅君は捕まったら、もう・・・だから、早く逃げて・・・」

本当はもつと一緒にいたかった。この状態で離れるのは怖かった。

でも、ここで逃げてくれないと、彼は生きていられない。体もぼろぼろで、正直逃げ切れる保証は無い。私も、戻ってまた虐められるのは怖い。いや、こんな事件を起こしたら、きっと前以上に卑劣な虐めになる。生きる事が死ぬ事より辛い事だつてある。でも、このままじゃ可能性はゼロ。だったら、少しでもある可能性に懸けたい。だから逃げて、お願い！

そう念じた時、彼は笑った。これが、最後の笑顔かも知れない。彼は私の手を軽く払い落とすと、もう一度笑った。

「分かった。紗紀の気持ちは読めた。絶対、絶対もう一度迎えに来るから」

後ろから、じりじりと詰め寄ってくる銃。振り向く彼の背中を思いつ切り押した。

「また来る。絶対！」

「早く逃げて！」

彼は向こう側へ走り出した。同時にPEPの隊員が横を通り抜けて追っ掛けていく。紗紀は、ゆっくり江東を振り返った。

「ふっ……何を無駄な行為を。さて、君はどうしようか？」

由雅を送り出す時から感じていた。もう、私は殺されるかも知れない。足も使えない、抵抗する力も無い。本当……何で私はこんな所にいるんだろう

再び涙が零れ始めた。その時、江東がいきなり話し掛けてきた。

「では、木凧紗紀。君にある選択を与えよう」

顔を上げた。江東はこんな泣いている少女を見ているとは思えない、相変わらずの冷酷な笑いを浮かべていた。

「二つの中、選べるのは一つだ。まず一つ」

江東は不気味に人差し指を立てた。

「君を、一番溺愛てきあいしている母の元へ返そう。そして地方への逃げ道を作ってあげよう。君はどうやら虐めを受けていたようだしね」

「由雅君は……どうなるの……？」

「彼は死んでしまうでしょうね」

江東は小さな玩具おもちゃが壊れてしまつたろう、程度の答え方だつた。

「じゃあ、もう一つは・・・？」

江東が次に中指を立てた。

「もう一つは、君を彼に会わせ、二人で外国にある特別な施設の中で一生を過ごしてもらいます」

「それって」

「その通りです」

言葉が遮られた。江東が楽しそうな表情になつた。紗紀はもう生きていく気がしていない。体は震えすらしなかつた。

「それはつまり母との別れを意味します。まあそつちは殺しはしませんけどね」

「そんな・・・」

頭に、優しい四つの目が浮かび上がる。

「母親を選ぶか、三城由雅を選ぶか・・・君にはこの選択をしてもらいます」

目の前が真っ暗になつた。あのどちらかを諦めなければならぬ。そんな事、出来る訳が無い。お母さんは、今まで私の全ての支えだつた。お父さんに嫌われながら生活する私をいつでも庇かばい、その恐怖が無くなつた今、もう躊躇する事無くお母さんに甘える事が出来る。誰に邪魔される事無く愛情を受ける事が出来る。でも、由雅君も、突然襲われた私を助け、そして全く知らない女の子をこんなに救つてくれた。本当に、お母さんと同じ位

紗紀の心の中はどす黒い闇に落ちていた。こんな幼い少女が、こんな残酷な選択肢をぶつけられて普通に答えられる訳が無い。その上、紗紀は虐めを受けた事で元々精神的に弱く、その辛さと引き換えに並以上の優しさと思いやりを持っている。尚更こんな選択は出来るはずが無い。そこを、江東は利用した。

その時、紗紀の頭に一つの疑問が生まれた。ゆっくり重い口を開いた。

「・・・何でそんな事知ってるの？」

「そんな事？」

紗紀は下を向いたまま続けた。

「何で、私が虐めを受けてるとか、お母さんの事とか、知ってるの？」

「それは当然、彼のようなパイロキネシストを探す為に色々な情報が必要ですからね。日本中、いや世界中の情報が入ってきますよ。本当、無駄な位にね」

江東はこの時、余裕を感じていた。この後起きる、予想外の事態も知らずに。

「さあ、どちらにします？」

そう言われた時、江東の腰辺りから何かの音楽が流れてきた。江東は腰のポケットから携帯を取り出し、電話に出た。紗紀はきつと由雅の事に違いないと感じ、目を閉じた。

「なるほど。そうか・・・では一旦退け」

そう言って江東は電話を切った。彼の表情を何一つ変わらない。こつちを見ると、携帯を閉じながら話し始めた。

「君にとっての朗報だ。三城由雅は隊員を撒いたらしい」

紗紀は少し表情が安らいだ。しかし、そこで目の前の男は表情を変えた。

「何を安心している？君は自由になった訳じゃない」

「え・・・？」

江東はさつきと逆のポケットに手をつ突っ込んだ。そこから出てきた物は、拳銃だった。紗紀は大きく目を見開いた。

「色々ありましたからね。さっきの選択肢が無理になった以上、君はもう不要です。恨むならあの少年を恨んでください」

銃口が自分に向けられた。ぎゅっと目を閉じる。ごめん、由雅君

・・・なかなか撃たれなかった。恐る恐る目を開けると、

江東は銃を構えたまま、左手を顎あごに当てて何かを考えていた。私と目が合うと、またあの冷笑を浮かべた。

「良い事を思い付きました」

「良い・・・事・・・？」

「そうです。君も質問に答えませんでしたから、こちらの指示に従ってもらいましょう」

紗紀はその場から逃げたかったが、向けられた恐ろしい凶器に、全く身動きが取れなかった。ただ視界の真ん中に、汚らしい笑顔を見せた男が立っていた。

もう暗くなつた夜空にはくつきりと三日月が出ていた。河原の橋の下、小さな陰のスペースに少年が一人息を潜めていた。こんな事をしなければならぬ少年は、ただ一人しかない。

由雅は声を殺して、胸元を押さえていた。口からは血が一滴流れ出てきた。上を車が通る度に、心臓が高鳴る。今の状態ではもう火は使えない。これ以上、動く事も儘ままならない。左肩と首の真ん中辺りを一発、逃げる時に弾が貫通した。既にもう、傷口からの出血は止まっている。しかし、まだ癒えていない。

一番癒えていないのは、紗紀と別れてしまったショックだった。初めて「好き」という感情を抱いた。その女の子を、守れなかった。そんな自分が嫌だった。今、どうしてるだろう。

「何で守れなかったんだ・・・」

思わず声が漏れた。撃たれた肩より、疲労し切った体より、大切な人を失った心が痛む。同時に、自分に対する怒りが込み上げてきた。

火が使えるから何だ。自在に操ってるから何だ。いくら凄くても使えないなら意味なんて無い！こんな力が無ければ、普通に暮らせたのに。母と、父と、妹と・・・もう十年も昔の事だ。顔も名前も覚えていない。あの火事も、目の前に映る大きな炎と、謎の黒い影しか記憶に無い。

記憶の中から抜け出したのは、聞き慣れた音楽が鳴ったからだ。

上着のポケットから携帯を取り出して開いた。一瞬、それを見て驚いた。紗紀からの電話だった。慌てて悴かじかむ指で通話ボタンを押す。

「紗紀ちゃん？」

「私だ」

聞こえてきたのは期待と違う、低く憎たらしい声だった。その瞬間、ぞつとした。

「な……江東……！」

「ふん、どうだね？期待を裏切られた気分は」

「黙れ！彼女はどうしたんだ！無事なのか！」

「まあまあ、そう熱くなるな。彼女は私達が保護している。今はぐっすりと眠っているよ」

「どうせ薬か何かで眠らせたただけだろが！てめえどこだ！」

江東は少し間を置いて返事をした。

「彼女を返して欲しいのかい？」

「当たり前だ！場所を教えろ！」

「ならば、明日国会議事堂に来なさい。君にとって、大切な事を教えてあげましょう」

「俺の、大切な事……？どういう……」

「分かっている筈ですよ」

その言葉に、息を飲む。

「君の家族、パイロキネシストの秘密、そして君の正体についてね……」

「家族……！！」

「沢山の隊員を揃えてお待ちしておりますよ。早く来ないと、ふっ……」

「なっ、ちよつと待て！」

その声も空しく電話は切られてしまった。携帯を閉じると、膝に手を突いて立ち上がった。

国会議事堂……！日本政府の前で、しっかりと制裁してやろうってか……絶対、そうはいかない！きっと、そこに紗紀

ちゃんも……こつから東に、数十キロだ。もう、向かった方が良い。

足を痛々しく引き摺りながら河原を上がった。この道にはもう、誰も歩いていない。ただ冷たい風だけが体を撫でていく。体中が熱い。まるで燃えているようだ。でも体は燃えていない。燃える筈が無い。なのに、熱い。とても苦しい……

絶対に、守らなきゃいけないんだ。唯一信用出来た梶野さんが殺された……今紗紀ちゃんを守らなきゃ、全ての繋がりが消えてしまふ。そしたら俺は、何を求めて生きれば良いんだ。何を指標に生きれば良いんだ！大切な存在だから、たった二人目の繋がりがだから、あの時絶対に彼女を守ると誓ったんだ。自分の為に、彼女の為に、今この能力ちからを使うべきなんだ。

後方から来る煙に身を包まれながらただただ、意識も無く足だけが進んでいく。血を吐きながら、由雅は揺れる火の中を一步ずつ国会議事堂へと向かい始めた。

目を覚ますと、目の前に見た事のある風景があつた。体を起こし、場所を把握する。扇の形に連なる長い机。隣にある中央の一際大きな机。鮮やかな木製の茶色の壁に、不思議と緊張するような静かな雰囲気。ここは……？

「国会議事堂、衆議院議場ですよ」

気持ち声が漏れていたらしい。振り向くと江東がそこに立っていた。よく見ると、部屋の隅々に隊員が配置されていた。

「お早うございますね。今ちょうど九時になりましたよ。ゆっくり眠れましたか？」

「あつ、由雅君は！彼はどこ！」

「そんなに自分より彼が気になりますか。さて、彼なら今日中にここへ来るでしょう。多分ね」

そう言う江東はまた不気味な笑顔をした。そして、何か思い出し

たようにポケットに手を突っ込んだ。そして出した物を差し出す。

「あと、これはお返ししておきますね」

そこにあっただのは間違い無く紗紀の携帯だった。紗紀は急いで奪い取るように携帯を取った。

「何したの！」

「彼の番号が入っていたんでね。ちよつと利用させてもらいました。まあそのお陰で彼がこっちに来る訳ですから、これで五分五分ですね」

リダイヤルの履歴を見ると、由雅に一件掛けられていた。再び江東を見上げる。

「な、何て言ったの！」

「ふっ、君を返して欲しくばここまで来い、多くの部隊を用意して待っていますよと」

「じゃあ、ここだけじゃなくて、外にも・・・」

「その通りです。ご名答ですよ。今この議事堂には内外合わせて二百人のPEP隊員がいます。しかも、彼の為にスペシアルな強力武器を用意していますよ」

駄目・・・！このままじゃ、あんなに傷を付けて、高熱まであつて、火も大量に使つてもう限界の由雅君は殺されちゃう！急いで伝えないと

全く電話が掛からない。二回目もやはり通じなかった。そんな紗紀を見た江東が口元を緩めた。

「電話を掛けようとしても無理ですよ。その携帯はこっちの機械のプロが機能を壊しましたから。もう通話もメールも何も出来ませんよ」

「酷い！何でこんな事するの！国が人の権利を奪ってどうするのよ！」

「そんなもの、命よりも全然軽い犠牲ですよ」

まるで当然とも言つように江東は話す。

「三城由雅を、確実に捕らえる・・・いや、殺す為ですよ」

「何のメリットがあるのよ！」

「そうですね、日本の平和を守る為と、私の株でしょうか」

日本を守る？自分の利益？その為に、彼の命が奪われるの？・・・彼のどこが悪いの？火を使うのが、人と違うのがそんなにいけない事なの？

思わず泣き伏せる紗紀に、江東はさらに追い打ちを掛ける。

「まあ何にせよ、世界にとって彼は不必要な人間、迷惑なのですよ」「ち、違う・・・」

もう上を向く事すら出来なかった。すると、江東は中央の議長席に上り、机に置いてある機械に触れた。何やら空中に映像が映り出した。そこには国会議事堂の正門の様子が映っていた。この部屋とは比較にならない程の、軍隊の数。

「さあ、我々は彼が来るのをここで楽しみに待ってようじゃないか」紗紀は何も出来ない自分に苛立ちを感じながらも、両手を握って額をそこに付ける。

由雅君、お願い！来ちゃ駄目！でも・・・助けて！

今、どこだ？どこまで来たんだ・・・？携帯は向こうで何かやってくれたのか、全く通信が出来ない。それでも、国会議事堂を目指してふらふらの体を無理やり動かす。ふと、数メートル前の看板が目に入った。

世田谷区・・・！あと、約十キロだ。日が昇ってだいぶ経っている。急がないと、紗紀ちゃんが危ない！

つい今、彼女の声が聞こえた。もう、幻聴まで聞こえたか。限界かも知れないな・・・でも、彼女はそう思っているに違いない。絶対、助ける。全て、燃やしてでも・・・！！

突然、警報が鳴り出した。椅子に座っていた江東は立ち上がり、

映っている映像に目を向けた。

「・・・来たか」

その言葉に紗紀は顔を上げて映像を見た。まさか・・・

「由雅君・・・？」

その映像には、一見彼の姿は無い。正門に入ってくる豪快な火の竜巻。警備をしていた隊員を吹き飛ばし、どんどんこつちに向かっている。そして、一瞬間が出来た時だった。そこから中に人がいるのが分かった。それは

「あつ、由雅君！」

その瞬間江東がマイクに声を張り上げた。

「奴を仕留めろ！そんな火柱ただの大きな火だ！絶対この中まで入れるな！攻撃を開始しろ！」

その指示とともに一斉に隊員が銃を構えた。

「やめて！殺さないで！」

紗紀の叫びも空しく、PEPの総攻撃が始まった。左右にある垣根の後ろの軍隊から、次々に撃たれる弾。弾が竜巻に当たり、何度も小爆発が起こる。見るからに強力そうな砲撃が、由雅の姿を消していく。通路の真ん中が煙に包まれ、PEPの攻撃が止まった。彼からの抵抗が無い。もしかして・・・

「ふっ、さらばだ。三城由雅・・・最期に立ち向かってきたその勇氣だけは認めてやろう」

「そんな・・・」

紗紀はがくりと首を落とした。その瞬間全身の力が抜けるようだった。終わってしまった・・・目の前で命の恩人は、その優しい少年は、初めての恋人は

「さて、用も済んだ事だ。君を家に帰してあげよう。その前に・・・

「

「本部長！彼はまだ生きています！」

外の隊員からの突然の連絡だった。紗紀も江東も映像を確認した。

「何？」

煙が消え去ると、その中からただ前を見据えた少年が出てきた。見た目でもう限界だと分かる彼の体は、いつもと違う、恐ろしいような炎を纏っていた。それは、今までの能力者とは全く比べ物にならないものだった。更に隊員の報告は続く。

「彼の周りの温度が非常に危険な高さに達しています！現在5000度！5300度、5700度、6100度！どんどん上昇しています！」

「6000度！太陽と同じ温度だと・・・！今までそんな熱を出したパイロキネシストはいないぞ！」

「彼はさっきの銃弾は一発も当たっていません！全て、あの火の竜巻によつて溶かとされているんです！」

「それならば、彼の体温はどうなんだ？」

「測定によると彼の体温は三十八度九分です！」

三十八度九分・・・？周りの温度はほとんど影響が無いのか？という事はまさか、奴はあれを完全に制御コントロールしているというのか！しかし、それならば何故今までその力を出さなかったのか・・・いやまさか、三十八度九分の熱は元々彼の体調？つまりあの力は、奴の調子が悪い為に暴走しているのか？

「本部長、このままではこの周辺は危険です！」

とにかく、この状態を切り抜けなければ。こうなったら・・・

「私の声をスピーカーに繋げ。今すぐだ」

「は、はい！」

その後ろで、紗紀は張り裂けそうな胸を押さえながら状況を見詰めていた。

目の前で細い弾が熔け、べとりと地面に落ちた。その温度の中、地面や周りの草木は熔けるどころか、燃え出しすらしない。

久し振りに解放した全開の力。昔は全く駄目だった。制御出来なかった。だから、ピンチの時でも全力を出したくはなかった。だが

実際今やってみると、こんなにも簡単に使いこなせるとは思わなかった。これだったら、最初から使うべきだった。そうすれば、こんな事にはならなかったのに……

「見事だ、三城由雅」

そのスピーカー音と同時に、軍の攻撃がぴたりと止んだ。由雅も足を止めた。

「三城由雅。中に入ってきてきなさい。中で待ってます。彼女も一緒にいますよ」

ついに決戦か。薄汚い男め、覚悟しておけよ……！

「攻撃を止め、彼を私のいる部屋まで案内してやって下さい」

明らかに軍隊が戸惑って困惑している。少し躊躇った隊員の一人が、やっと一歩ずつ由雅の前まで歩いてきた。それでもやはり完全にこの力を警戒している。

「案内しよう。付いて来て下さい」

その男は少し声が震えていた。黙って振り返る男に付いていく。その時、後ろから、銃声がした。前の隊員が驚いた顔で振り向いた。由雅は反応しなかった。弾は、頭の後ろで溶けて消え去った。どうやら江東の指示を無視し、チャンスだと勘違いして撃った奴がいたようだ。こんな奴を相手にする必要も無い。誘導する隊員に付いていき、ついに中へと入っていった。

「どうしてだ？」

中の廊下を歩いている途中、前の男は振り向かずには訊ねてきた。

「何が？」

「君は俺が近付いた時、力を抑えようとしなかった。なのに、何故俺は熱くも何ともなかったんだ？答えてくれるか？」

「そのままですよ」

「え？」

男は半分振り向いた。由雅は相変わらず警戒するような態度で答えた。

「俺は、あなたが死なないようにそこだけコントロールしてただけ

だ

「そうなのか・・・それって、凄い事だな・・・」

ある扉の前で男は止まった。そしてドアの前に由雅を誘導する。

「ここだ」

黙って頭を下げ、ドアノブに手を掛けた。

「個人的にはな」

その言葉に動きを止めた。

「俺はこの組織は間違っていると思う。わざわざ人質まで取って、能力者を殺して、これじゃあ強盗殺人と一緒にだ。まあ済まない、隊員が言っても説得力は無いがな。でも、本部長を納得させて、あの子と一緒に生きて帰れよ。そうなる事を祈ってる」

その人は悪い雰囲気を漂わせていなかった。隊員全体が戸惑っていたあの時、躊躇ったとは言え、あそこで出てきて俺に近付くのはそう出来る事じゃない。この人は、もしかしたら案外良い人かも知れない。

「有難うございます」

目を閉じ、ドアを開けた。その瞬間、聞き慣れた声が耳に透き通って聞こえてきた。

「由雅君！」

部屋の中央から紗紀の叫び声が聞こえた。その声を聞き、体中の疲れが吹き飛んだ。しかし、決して安心出来る場所ではない。

部屋の至る所に隊員が置かれ、全員が銃をこちらに向けている。

しかし由雅の視点はそんな所に向いている筈が無い。

「ふっ、体調の悪い中よく来ましたね。三城由雅」

江東は余裕の笑みを浮かべていた。それもその筈、由雅は既に息を切らしていた。熱で体中がだるい。しかしそんな事は言っていない。数多く並ぶ机の間を、一歩ずつ踏み締めるように下りていく。机の列を抜けた時、由雅は立ち止まった。江東は後ろに手を組

み、隣の紗紀は立てない為に座り込み、後ろで手を縛られていた。

「江東、その子を放せ」

「まずは落ち着きましょう」

「放せ！」

右の机を思いっ切り叩いた。そしてそこから火が上がった。

「彼女の手錠には爆弾が仕掛けられている、と言ったらどうします？」

江東はポケットから銃を取り出し、紗紀の両手の方に向けた。

「とりあえず、話を聞きましょう」

暫く由雅は江東を睨み付けていたが、これ以上は危ないと感じ、火を消した。

「それで良いんですよ」

江東の目が不気味に細まる。江東のあの態度を見る度、抑えられない怒りと憎しみが込み上げる。本当は今すぐ殺す事も出来る。奴っている訳が無い。俺を撃ち殺し、そうなれば火の制御が解かれ一気に燃え広がり、江東のすぐ近くにいる紗紀に危険が生じる。今はただ、感情を抑えて歯を食い縛る。

「まずは何から話しましょうか」

江東は少し間を置いて、口を開いた。

「そうですね、まずは家族の事を話しましょう」

「えっ」

声を上げたのは紗紀だった。そう反応するのも当たり前前の事だ。

既に由雅の家族は、過去に由雅が起こした火事で亡くなっている。

「電話でも言っただけどどういう事だ。俺の家族はもう既に死んでいる。今更何を掘り返そうってんだ」

「掘り返しはしません。君に会わせるた為にここへ呼んでいます」

「何！」

一瞬、由雅は全ての記憶が頭の中を駆け巡った。しかし、そこに家族の姿は映らない。我に返り、自然に辺りを見回していた。何か

を感じる人物は、その影すら一人もいない。

「そんな、ここに死人がいる訳無いだろ！」

「ちゃんといいますよ。一人はここに」

「どこにもいないじゃねえか！」

「どこを見てるんです？」

由雅は江東の方に振り返った。江東は無表情で由雅を見ている。

まるで玩具を隠され必死に探す子供を見るような目だ。それでも分らない由雅に、江東は更なるヒントを与える。

「目の前にいるじゃないですか」

「目の・・・前・・・？」

戸惑う由雅の言葉に、江東は左下を見下ろした。

「そうです。すぐ目の前に、可愛い妹がいるじゃないですか」

「まさか・・・！」

由雅と紗紀の声が重なる。江東は由雅に向き直し、満面の笑みで表情を綻ほころばせた。

「この子は、君の妹ですよ」

一気に空気が静まり返った。由雅は突っ立ち、ただ紗紀の方を見詰めていた。紗紀もまた、何も出来ず視線だけが由雅に向いている。

「紗紀ちゃんが、俺の妹・・・？」

「由雅君が、お兄ちゃん・・・？」

「その通りだ」

「嘘だ！」

紗紀が高い声で叫んだ。隣の江東もぴくりと反応した。紗紀は下を向き、体を震わせている。

「そんな訳無い！絶対嘘だ！」

「違うという決定的証拠がありますか？」

「待て！」

次は由雅が叫んでいた。少し取り乱す紗紀を目で落ち着かせ、江

東に視線を移す。

「何故あの火事で死んだ妹がここにいる？」

「それは簡単、あの時に生きてたからですよ」

「でも確かに俺は全員死んだって聞いた記憶が」

「それは誰から聞きましたか？」

その質問に由雅は眉を顰めた。相変わらず、江東は無表情のままだ。

「誰って、確か……」

あの時話してきたのは、誰だ？必死に脳の奥までを探り、答えを探し出す。その人物は……

はっとした。その瞬間、江東があの悪魔のような笑い顔になった。そうだ、何であの時気付かなかったんだ！

「お前が、俺に……」

「やっと理解しましたか。もっと早く気付いていれば、家族を捜せただしょうね」

「何故あの時殺さずに、嘘を教えて生かした？」

ふっと笑い、その男は答えた。

「君はあの時まで、持っているその能力を知らなかった。こちらで上手く教育すれば、意思を持つ完全な強力兵器になりますからね。戦争対抗用の、パイロキネシストという事ですよ」

「そんな、酷い……」

「ていう事は、両親も生きてんのか？」

「残念ながら、全員は死んでくれませんでした」

由雅は力強く拳を握った。今すぐ、江東をぶん殴りたい。でも、殴れない。そんな苛立ちが、時間に比例して溜まっていく。

「あの事件で死んだのは、父親だけです。この子も、君も、母親も、無事でしたよ」

感情を抑えられず、紗紀も顔を上げて口を開く。

「じゃあ、何で父親だけが死んだの？」

「彼を庇ったからですよ」

「庇う？俺はパイロキネシストだ。火は全く効かない。それに気付いてるなら庇う必要は無いだろ！」

「君は一つ勘違いしていますね」

「勘違い……？」

江東は持っている銃を指で回し始めた。

勘違いだと……？パイロキネシストは火を出す。それゆえに火に耐性があり、火傷も怪我もしない。その、何が勘違いだって言うんだ！

「確かにパイロキネシストは火に耐性があります。自分が操っている火ならね」

「……！一体どういう事だ」

「君はそういう体験が無いのかね？それもなかなかの偶然だが、君は自分の操るもの以外の火に当たった事は無いのかね？君のように操る人間はいなかったが、パイロキネシストは火に強い訳では無い。研究によつて、それはもう分かっている事だ。確かに操っている火なら何ともない。自分の周りを燃やしながら、目の前の人つまり、火事の火が君のコントロールを受けていないとなれば、君は燃えるだけだ」

「研究？」

「良い所を突きましたね。君の父親、八木沼浩之やきのぬまひろゆきは、パイロキネシストの第一研究者だったのですよ」

「な……父さんが？」

思わず声が出ていた。返事の代わりに、江東は話を続けた。

「研究者の子供がパイロキネシストとは何とも凄い偶然ですね。それもその筈です。彼もまた、パイロキネシストだったからですよ」

「そんな……！」

「馬鹿な、そんな筈は無い！パイロキネシストはお前等が殺してんだろ！何故そんなに生きられたんだ！」

「条件を飲んでいたのですよ」

「条件？」

江東は机に置いてある書類を手を取った。そしてそれをこつちに  
見えるように縦にした。

「彼の研究結果を私に渡す代わりに、命は救つてあげるとね」

「そうだったのか……」

その書類には「発火能力者研究事項」と書いてあつた。それを見  
て、由雅は俯いてしまった。実の父は自分と同じパイロキネシスト  
だった。いや、俺が父さんの血を引いたのか……

「それと、もう一つ君に隠している嘘があります」

「何？」

「あの火事、実は君では無く、彼が原因なのですよ」

由雅と紗紀は驚愕した。由雅は思わず周りの銃も気にせず前に一  
歩踏み出した。

「ちよつと待て！ どういう事だよ！」

「確かに君が火事を起こしましたが、それは彼が火を起こして驚き、  
びっくりしたからです。私が彼の家を訪ね、その時私が君も能力を  
受け継いでいる事に気付き、実験用に渡す事を要求したのです。と  
は言いつつもさっきの通り兵器に使うつもりでしたがね。もちろん  
彼は拒否しました。それでも私はどうしても君の身柄が欲しく、そ  
れで揉めた結果、彼は激怒して感情を抑えられず、あの火事になつ  
た訳です。そして妻と妹はすぐ外に出られましたが、二階に取り残  
された君を救う為に、彼は火に耐性が無いと知りつつも、いや知っ  
ていたからこそ、炎上する家に飛び込み、中で君を抱いたまま焼死  
体として発見されたのだよ。そして君は軽い火傷で済んだのだ」

「結局、お前が考えた変な企みの所為で……」

「君、上を脱ぎなさい」

「あ？」

言つてる意味が分からなかつた。しかし、すぐにその意味は理解  
出来た。暫く下を向いていたが、黙つて上着を脱ぎ、シャツも脱ぎ  
背中を向けた。それを見た紗紀が、両手で口を押さえ、悲しそうな  
声を漏らした。

「その火傷が何よりの証拠だ」

背中を中心に斜めに付いた、まるで大きな切り傷のような火傷がそこにあつた。服を着直すと、再び江東に向き直した。

「パイロキネシストは別に火に強い訳でもなくて、あの火事も色々あつたつていうのは分かつた」

そして、紗紀に視線を移す。

「でも、紗紀ちゃんが妹だつていう決定的な証拠が無い！それは……」

「これを見て下さい」

由雅の言葉を遮り、足元に一つの封筒を投げつけてきた。警戒しながらもそれを拾い、中を確認する。それを見た由雅の体に衝撃が走つた。

「納得しましたか？」

由雅は返事もせず、ただその紙を見て驚愕している。

「三城由雅、いや……八木沼由雅よ」

由雅はその場に戸籍ごと封筒を落としてしまった。その戸籍にはそう書いてあつた。父親、八木沼浩之。母親、木尻紗江。そしてその子供、由雅、紗紀。

紗紀も落とした戸籍を見て、固まってしまった。

「分かつたかね？君達は真正銘、実の兄妹きょうだいなのだよ」

その戸籍は本物だつた。一気に目の前が真っ暗になった。辺りに映るものが、何も無い。

という事は、俺は、今まで実の妹と過ごしてきたというのか……？そうだ、母さんも生きてる。紗紀と一緒に今まで生きてきたのか……？顔も性格も分からないけど、生きててくれて良かった。でもそれより、あの電車で俺が助けた時点で、もう別れていた妹が目の前にいたという事だつたのか。確かに初めて紗紀を見た時、何かを感じた。普通の人とは違う、妙に心が読み取れるような感覚が。だからあの時、紗紀が何か事情があるのに、何か隠しているのに気が付いたんだ。家出と聞いた時も、何となく驚かなかつ

た。

「君を捕まえ、適当な国に置いておくだけで、その能力で一国を落とせますからね。世の中の戦争を止めるには良い方法でしょう。まあ、まさかコントロールが出来る程の逸材いっさいとは、当時は思いませんでしたがね。しかし、私に狙われると知ったのか感じたのか知らないですが、あの三城夫妻が余計な事をしてくれましたよ。あの火事の後、流石に色々話題になり、君を無理に連れ出す事は出来なかったのです。だから私はとりあえず、木尻紗江を多少荒い手ですが君をパイロキネシストだと言い納得させ、君には家族が死んだと嘘を付き、引き離す事にしたのです。しかし組織しゅうちで何かをやっていると国に怪しまれるので、その時はまだ国の方が上だったのですね、とりあえず取引をして一般人の三城夫妻に君を預けたのです。そしたらまさか裏切るとはね。まあ今に至る訳ですよ」

今思い返せば、義父とうふさんも義母かあさんも普通ではなかった。日頃から何かそわそわしていて、俺が小学校から帰る度にほっとしたような表情を見せていた。そして、俺を逃がしたあの時。確かに義母さんは「とにかくここから真っ直ぐ西に逃げなさい」と言っていた。

それが意味するもの。それは、実の家族の居場所。俺が辿り着いた場所に梶野さんのような心優しい人がいたのも奇跡だが、それ以上に奇跡なのは紗紀に会った事だ。更に考えてみれば、紗紀に初めて会った夜、紗紀の切符は住んでいた場所から西にたった六つ目の駅からだった。その時に気付くべきだった……！

話を聞き、悩んでいたのは紗紀もそうだった。すでに目が潤んでいた。

母の以上な位の優しさ。それは、大切な息子を奪われ、苦しんでいたからなんだ。普通は出来ないようなお願いでも、何でも私にしてくれた。酷いお父さんからいつでも私を庇い、私の為に尽くしてくれた。少しでも体調が悪いと一日中看病してくれたり、時間が余ると一緒に遊んでくれたりどこかへ連れて行ってくれたり。一時不登校になった時も、朝から晩まで何もせずと一緒についてくれた。

ずっと横に座っていてくれた。たまに、お母さんは一人でアルバムを見ながら泣いてる時があった。その時は分からなかったけど、そこには幼い兄の姿が映っていた。そしてアルバムを見た後、必ず泣きながら私を抱き締め「ごめんね、ごめんね」と繰り返していたのだ……

兄妹はただ悲しさを噛み締め、下を向いているしかなかった。そんな光景を目の当たりにし、江東が嬉しそうに口を開いた。

「あともう少し残った事を教えておきますが、死んだ高峰尚一も、君を虐めるよう他の子に指示したのも、どちらもPEEPですよ」

二人の顔が反射的に上がった。紗紀の目が驚きに、由雅の目が怒りに染まっていく。

「何で、そんな事する必要があんだよ……」

由雅の怒りに震えた声が、江東に向けられた。江東は平然とした表情だった。

「今までの話の流れで分かりませんか？君を捕まえる為ですよ。まずさっきの説得の中に高峰を結婚させるという条件の元で、八木沼が作った研究を悪用しない事を約束しました」

「どこが約束だ！」

「そんなのこつちを有利にする為の道具に過ぎませんよ。そして高峰を置く事に依よって木風紗江の不審な行動は全て封じる事が出来る訳です。そして虐めた方の目的は、計画通りでした」

「え？それって……」

「まさか……！」

江東がニヤリと表情を変えた。

「そうです。家出狙いですよ。まあ、君と一緒にだったのは奇跡に近い、嬉しい誤算でしたがね。あとで失敗だと気付きましたが、発想の逆転でそのまま作戦を続けたのです。そうすれば感情は膨れ上がり……私は、ある可能性に賭けていたのですよ」

「ある、可能性……？」

「分かりませんか？血、ですよ」

紗紀も由雅も、気付いた。その可能性とは……  
「紗紀も、父さんの血を、能力者の血を引いている可能性……」

「その通りです。実際君も見つかったし、能力も無かったので用済みですがね」

「だったら、解放しろよ」

「はい？」

その途端、場の空気が凍りついた。紗紀ですら、背筋が凍るような恐怖感を覚えた。

由雅の掌に、それこそ彼の怒りを表現したような真っ赤な炎が渦を巻いていた。それは見るだけで脅威を感じさせた。

「そんな事の為に、人の妹に手え出してんじゃねえぞ……」

「おやおや、兄妹愛ですか？まあそうですね。妹さんの事、大好きですもんね。でも世間じゃそういうのを、シスコンって言ってますよ」

「それで結構だ。今の俺にとって妹以上に大切なものなんて、何も無い」

「お兄ちゃん……」

紗紀の目に涙が浮かぶ。涙に霞む兄の姿と、心に灯り始めた何か。迫り来る恐怖に、紗紀の心臓はもうはち切れそうだった。

「紗紀、今」

突然、由雅の体が沈んだ。大きく目を見開いた。飛び散る赤い液体。後方から来た銃弾が、由雅の右膝を貫通していた。弾は完全に膝の関節を砕いていた。由雅の体が膝から崩れ、その場に倒れてしまった。

「お兄ちゃん！」

「紗紀……」

視界が大きく揺らぐ。物体が奇妙に動いていて、気持ちが悪かった。その視界の中を、一つの影がこっちに迫ってくる。

「ふっ、無様ですな。まあ、優しい私はせめて最後に、最愛の妹の

前で息を引き取らせてあげましょう」

「やめて、殺さないで！」

「まあまあ、しょうがないですよ。恨むのだったらその血を持っていた父親を恨んで下さい」

江東は左足で由雅の頭を踏み付けた。そしてサッカーボールのように弄ぶ。銃をしつかりと持ち直している。

「やめてよ！人を殺すなんて最低だよ！」

「うるさいですね。そんなに騒ぐと君も撃ち殺しますよ」

「うつ……」

黒い凶器が紗紀に向けられる。びくつと紗紀の両肩が小さく震え、顔全体に恐怖心を表した。

「やめろ」

江東が下を向いた。由雅が彼の足を掴み、睨んでいた。

「これ以上、紗紀に手を出すな……」

これ以上、妹を苦しめるな！俺の一番大切な存在に触れるな！あいつは今まで苦しんできたんだ。折角これから幸せになれそうって時に、その命を奪うな！

「黙りなさい」

江東は由雅の腕に向けて発砲した。由雅の左腕に当たり、着弾点を中心に血飛沫が飛んだ。

「があっ、ああ……」

「お兄ちゃん！」

「汚い手で触らないで下さい」

江東は血塗れになった腕を蹴り払い、とうとう銃口を由雅の頭に向けた。そして不敵に笑う。

「撃たないで！お兄ちゃんを助けて！」

「紗紀……」

「うるさいですよ。あなたは赤ちゃんですか？そんなに声を上げて泣き喚くのはやめて下さい」

「お兄ちゃんを返して！返してよ！」

「時間です。さらばですね」

「嫌！駄目ええ！」

銃声という空気の振動が、議場全体に伝わった。

瞬間的に、幼き日の記憶が蘇った。庭ではしゃいで駆け回る二人の兄妹。二人と楽しそうに遊ぶ父親。椅子に座って笑顔で見守る母親。この風景、何年前の事だろう……。心の奥にある細い糸がぷつりと切れた。議場が、火の海に包まれた。

「紗紀！」

倒れた妹は反応しない。ただその場に、動かず横たわっている。

「てめえ、よくも紗紀を！」

「全くうるさい妹ですね。ま、脇腹の辺りでしたが、多分大丈夫でしょう。心配はいりませんよ」

江東は踏み付けていた足を離し、紗紀を撃った銃をポケットに仕舞った。そして出口に向かう。

「脱出しなければ。おい、他の奴等も避難しろ！」

しかしどんだん火が燃え広がり、端から燃えていく。脱出を試みた江東は机の列の真ん中で火に囲まれてしまった。他の隊員達は煙にやられたり、既に火に飲み込まれてしまっていた。

「く、くそつ。このタイミングで飛んだ真似しやがって！私は、私はああああ！」

悲痛な叫び声と共に江東は倒れた。そして、火の中に姿を消した。「終わった……」

思わず言葉が漏れた。最後に妹が仇を討ってくれるとは思わなかった。

紗紀

まさか、こんな時に血が目覚めるなんて……

……今まで彼女が能力を発揮する事は無かった。俺と出会う前だった。きつとそつだ。……江東の推測は正しかった。彼女も血

を引いていた。でもまさか、こんな時に目覚めるとは思わなかっただろう。実の兄が撃たれるかも知れないという状況で起きた、感情の爆発。もしくは撃たれた事に依って全てが吹っ飛んでしまったのかも知れない。

右手で体を引き摺り、紗紀の方に近付いていく。右膝の痛み、左腕の痛み、そんな事より紗紀の安否が心配だ。とにかく早く、紗紀の元へ。

「お兄……ちゃん」

「紗紀！」

ちょうど右手で頭を触れる位の距離に近付いた時、紗紀が苦しうに目を閉じたまま言った。

「早く、逃げて……」

「駄目だ！次は絶対に傍そばにいる。もう一人にはしない」

「でも……」

「俺も動けないし……死ぬ時も、ずっと一緒にいるから」  
もう一踏ん張りし、隣まで移動した。腕を回し、紗紀の頭を抱き寄せた。

ずっと一緒に。もう紗紀を一人にしたり、寂しい思いをさせたりしない。この先もずっと横で、こうして……本当に辛かったんだよな。こんな所に連れて来られて、今にも殺されるっていう恐怖感を心に刻まれて、最期には撃たれて……

もうここで死ぬ。そう覚悟した。二人とも足は使えない、意識は薄くなる一方。だから、死ぬしか無い。既に火は部屋全体に燃え広がっている。出口のドアも半分以上は炎に包まれていた。二人の数メートル手前まで火が迫っている。まるでじわじわと二人を死の世界へと誘い込むようだ。何も出来ない。いや、これまでも何一つ出来なかった。ただ妹を犠牲にして死んでいく。それだけだった。俺がもがいて、変わった事は……

突然、火に包まれた議場の扉が開いた。朦朧とする意識の中、その音が耳に響いた。そこから一人の男性が入ってきた。派手に燃え上がっている机も気に掛けず、その机の間を駆け下りてくる。隣で由雅が顔を上げた。

「由雅、紗紀ちゃん、大丈夫か！」

「梶野……さん？何でここに……」

「そんな説明は後だ！とにかくここを脱出するぞ！」

梶野は由雅と紗紀が手足を撃たれている事に気が付くと、驚きながらも由雅を抱え始めた。

「梶野さん、俺より、紗紀を……」

「黙ってる！中学生二人位同時に持ち上げられるっつーの！」

「そうじゃなくて、腹を撃たれてて紗紀が危ない状態なんだ……」

兄はこんな時まで私の事を心配してくれた。

「んな事分かってる！お前だって重傷だろが！良いから今は喋るな！」

梶野さんは見た事の無い位真剣な顔で怒鳴っていた。私は喋る事すら出来なかった。動く事も出来ない。私とお兄ちゃんを両肩に抱えると、梶野さんは立ち上がって出口へ走り出した。火が燃え上がる部屋の温度で、体の熱が徐々に上がってきている事に気が付いた。それだけじゃない。息が苦しくなり、その呼吸のテンポが異常に速い。

もう駄目だつて、諦めていた。お兄ちゃんも撃たれて、自分の所為でこんな危険な状況を作つて、でも……死にたくない。生きたい！生きて、お母さんに会いたい。お兄ちゃんと、梶野さんと、皆で暮らしたい。皆でご飯を食べたい。皆で楽しく

梶野さんは議場を出ると、出口に向かって長い廊下を走った。もう全体的に火が燃え広がっていた。パチパチと燃える音と、梶野さんの足音、自分と兄の小さな呼吸音だけが耳に入る。

「もうちょつとだからな、頑張れ！」

励ましの声も空しく二人の体力は限界に達していた。その時、前方に出口が見えた。立ち込める煙の中、梶野は二人を抱え全力で走る。開いている扉を抜けると、久々の光が三人の体を照らした。視界が眩しく真っ白な世界になった。

そこには数台の救急車と、心配そうな隊員達の姿があった。実は彼等はほとんどの者が、パイロキネシストの抹殺に抵抗を感じていたのだった。三人を心配し、それぞれ集まってくる。紗紀は薄れていく意識の中、今まで感じた事の無い人々の温もりを感じた。

目を開けた瞬間、真っ白い天井が視界に映った。右手で上体を起こし、辺りを見渡した。静かな病院の一室。右側のベッドには、紗紀が可愛らしく安らかに寝息を立てていた。そして梶野さんが汗を拭いてあげていた。気付いたのは、右足が動かせなかった。動く訳が無い。粉碎した右膝と撃たれた左腕はしっかりと固定されていた。「由雅、やっと起きたか」

「うん……」

言いたい事は沢山あったのに、どれも言葉として口から出なかった。これで、終わったのだろうか？

「今、何時？」

「十時だ」

「え？」

由雅は瞬きを繰り返した。それもそつだ。国会議事堂に着いた時、確か正午近くだった筈だ。戸惑う由雅の思考が分かったのか、梶野が笑った。

「二人とも重傷で昨日は意識が無かったんだ。もう今は翌日だよ。一日経って、どうやら意識が回復したみたいだな。医者ってやつは凄いな。言ってた通りだ」

「紗紀は？」

「大丈夫だ、安心しろ。見た目通り、ぐっすり眠ってるよ」

「そつか……」

その一言を聞いて、一番安心した。全身からすーっと力が抜けていくのが分かった。

「由雅」

「何？」

「国会議事堂で、何があつた？」

一瞬その問いに戸惑った。

「あの組織のトップ、江東とかいうんだろ？あいつが何をしてきたんだ？」

由雅は少し俯くと、もう一度顔を上げて話した。

「色々な事実を知らされた。俺と紗紀が兄妹だつて事とか」

「兄妹！何だそれ。凄い偶然だな……由雅の運命の出会い  
はまさかの妹か」

「あの、まだ一つしか言つてないんだけど」

「ああ、悪い。驚いてつい」

梶野さんはタオルを置くと、二つのベッドの真ん中に置いてあつたパイプ椅子に腰を下ろした。

「で、死んだ本当の父さんがパイロキネシストで、その研究者だつたんだ。あの火事も父さんだつた。それで、血を引いたのが、俺と……」

由雅は紗紀に視線を移した。梶野もその視線を追い、事情を理解した。

「議事堂のあの火は、お前じゃなくて紗紀ちゃんだつて事か？」

「うん……多分、撃たれたショックが引き金になつたんだと思う。でも結果的には江東がその炎に巻き込まれて、仇は討つてくれたというか、でも」

「でも？」

「紗紀はこれから、苦しむかも知れない」

その意味は梶野もすぐに分かった。紗紀が能力を制御する事が不可能な以上、感情によってその能力に振り回される事になるかも知

れない。これからは特に思春期だ。色々な感情に揺さぶられるだろう。きつと悩むだろう。その中でいかにその爆発を抑えられるか。

「何で、こんな事に……………」

「由雅……………」

その時、ぽんと手を肩に置いてきた。梶野さんは優しい表情でこちらを見ていた。

「大丈夫だよ。お前の妹だろ？そんな弱くないって」

その言葉は何故か信用出来た。言葉は出なかったが、笑って頷く。「それに……………」

外からバタバタと足音が聞こえた。途端に扉が開く。

由雅と梶野は驚いてしまい、一瞬固まった。

そこには一人の女性がいた。息を切らし、扉に手を突いている。

「あの、もしかしてお母さんですか？」

梶野の声にはっとした女性は、小さく頷き、部屋に入ってきた。

するとその音に紗紀が目を覚ました。

「ん……………あれ？」

「紗紀！」

「あつ、お母さん！」

紗江は起き上がった紗紀に抱き付いた。そして紗紀も必死に抱き付く。

「紗紀、ごめんね。私が、私がしっかり守ってあげられなかったから、だから……………」

「ううん、お母さんは悪くないよ。それは私だもん。心配掛けてごめんなさい！」

二人は一斉に泣き出した。緊張の糸が解け、部屋の中は二人の泣き声に包まれた。そんな二人の姿を、由雅は戸惑った二つの目で見詰めていた。

「あ……………」

紗紀の涙目が由雅の瞳を捉えた。戸惑った由雅はどうする事も出来なかった。紗紀が紗江の袖を小さく引っ張る。

「お兄ちゃんが、守ってくれたの」

紗江はその言葉を聞き、紗紀を放した。そして、視線を由雅に向ける。

「由雅……由雅なのね？」

「あ、う……」

何て言ったら良いのか分からない。顔も全く知らないこの女性。

木風紗江。名前も記憶に無い。でも、この人は絶対に自分の母なんだ。

「由雅……」

ある事を思い出した由雅はゆつくりと右手を前に出した。そして掌を広げた。

「……母さん」

そこに一瞬、小さな火が灯ともった。紗江の目は驚いていなかった。

むしろ、雫が零れた。

「俺が、由雅だよ……」

紗江は由雅を優しく抱き締めた。

「ごめんね、今までずっと、寂しい思いをさせてきて。本当に怖かったでしょう……？」

「母さん……」

何が起こってるのか分からなかった。確実な事は、泣いていた。

今自分がどうい感情なのかも分からない。なのに、目からは大量の涙が出てくる。

「本当にごめんなさいね。こんな母さんを許してね」

「良いんだよ、もう……会えたんだから」

温かい涙が額に落ちてきた。ずっと、母さんはその状態で泣きながら立っていた。

「お兄ちゃん、良かったんだよね？これで、良かったんだよね？」

「紗紀……」

暫く泣いていた紗江は由雅を放し、梶野に声を掛けた。

「あなたが連絡してくれた……」

「あ、梶野亮介です。自分は由雅の事を見守ってただけです。当然の事ですから。礼はいりませんよ」

「本当に、有難うございます。何とお礼を申し上げたら良いか……」

「礼は大丈夫ですってお母さん。ほとんど彼は自分で生活していましたから。自分は本当何もしていないですよ」

「本当、本当に有難うございます」

紗江は梶野さんの手を握り、何度も頭を下げていた。その時、潤んだ目でこちらを見た紗紀が、にっこり笑った。こっちも涙を拭い、笑い返した。

「母さん」

紗江は由雅に振り返った。

「少し質問、訊いても良いかな？」

「何？」

由雅は一度紗紀を見てから、母親の顔を見た。

「俺と紗紀って、双子？」

大きく目を見開いたのは紗紀だった。紗江は優しい顔で答えた。

「分かったの？」

「紗紀の心がね」

紗紀はゆっくりと足をベッドの横に下ろし、梶野さんの助けを借りて立った。よたよたした体を支えられながら、由雅のベッドまで移動してきた。そして由雅の右に座る。

「何となく紗紀の気持ち分かる事があったんだ。だから……」

「やっぱり二人の方が可愛いわね」

「え？」

思わず紗紀と由雅はお互いを見た。紗紀だけは再び紗江の方に振り向いた。

「おんなじ日に生まれたのに、紗紀が小さいから何か年の離れたラブラブカップルみたいね」

「そつだよ、お母さん」

由雅はえっ？と訊き直したが、答えずに紗紀は笑顔で振り返った。そしていきなり、由雅に口元を合わせた。顔が離れた後、由雅は顔を赤くして戸惑っていた。反対側に回った梶野が由雅の頬を指で突く。紗江は驚いていたが楽しそうに微笑んでいた。

「紗紀………」

「私はお兄ちゃんが好きだもん」

「良かったな、由雅。紗紀ちゃん可愛いもんな」

「え、いや………兄妹なのに、これ………」

「由雅、愛に兄妹も家族も無いぞ」

梶野さんは笑いながら由雅の頭を撫でた。由雅は恥ずかしそうに視線を落とした。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「ばっ！」

突然紗紀の両手の掌の上に火が灯った。三人は驚いた。火が点いた事にもびっくりだが、本当に驚いたのは、火が全く燃え広がらない事だった。ただそこで黙々と灯っている。

「ほら見て見て、出来ちゃった！」

「え………何で？」

「由雅だけの筈なのに、紗紀ちゃんまで………」

それを見た紗江はふと思い出したようにあつと声を漏らした。

「お母さん？」

「もしかして、あの人の言ってた事は、この事………」

「母さん、あの人ってまさか………」

紗江は目を閉じて頷いた。紗紀は今だ、制御出来た火に興奮して梶野さんに「見て見て！」とはしゃいでいる。

「浩之さん………」

「父さんが………言ってた事って何？」

「うん、あの事件の少し前の日、いきなりあの人はこう言ったの。」

『これで大丈夫だ』って。その数日前から、彼は能力を抑える為の研究をしていたの。それが成功したから、もう彼は火を使う事は無いと思ったの。そして、あの火事が起きた。失敗だったんだってあの時は思っていたわ。でも由雅も紗紀も、火を完全に抑えた。むしろ操っていた」

「父さんはそれだけは江東に教えなかった……」

紗江はゆっくり頷いた。そして続けた。

「あの人は、命と引き換えに私達を守ってくれたのね……」  
紗江はいつの間にか椅子に座り、窓の外を眺めていた。綺麗に飛行機雲が青い空を横切っていた。由雅もそんな空を釣られて眺めていた。

「お兄ちゃん！」

「うわ、何？」

「これ！」

「分かったよもう。いつまでもはしゃぐなよ」  
紗紀はぶくつと頬を膨らませた。こんな表情を見るのは、初めてだ。

「これね、実は朝、梶野さんが来る前に目が覚めて、その時に出来たの！両手じゃないと上手く燃えてくれないんだけど……」  
「そりゃそうだろ。まだ慣れてないからな」

その時、梶野さんが立ち上がった。荷物を持ち、扉の方に向かった。紗紀がそれを呼びとめる。

「梶野さん？」

「俺はまだやる事があるからな。……まだ、組織（おんしき）は生きてる」

僅かに身震いをした由雅に振り返り、梶野さんは笑顔を見せた。

「今がチャンスだ。裁判を起こしてやる！……俺にも、手伝わしてくれ」

「梶野さん……」

「あの、梶野さんも戻ってくるよね？」

紗紀は突然の質問を投げ掛けた。

「戻る？」

「うちに、来てくれるよね」

「もちろん戻ってくるよ」

そう言つと、梶野さんは笑顔を残して部屋を出て行ってしまった。後ろから、母さんが俺と紗紀を抱き寄せて言つた。

「大丈夫よ。あの人も、母さんも、そして父さんも……皆あなた達を守るから」

紗紀が小さく頷いた。

三人の心の中に、オレンジ色の優しい温かな火が灯つた。

紗紀は高校の門を走り出た。空は青く晴れ渡り、心地良い風がお祝いしてくれた。立ち止つて振り返り、彼を急<sup>せ</sup>かす。

「お兄ちゃん、早く！」

「そんな急がなくても良いだろ」

微笑みながら、のんびりと由雅が出てきた。

「良いじゃん良いじゃん、二人とも合格したんだから。早く帰つてお母さんと梶野さんに連絡しよ！」

「ああ、父さんにもな」

まだ少し寒い二月、今年で十六歳になる二人は高校の合格発表を見に来ていた。結果は二人とも、合格だった。

相変わらず背の低い紗紀は、差の全く縮まらない兄を見上げた。

「お兄ちゃん、帰つたらまたやるの？」

「ああ、もちろん」

「難しい？」

「高校の入試なんて比じゃないよ」

「どうせ私はお受験で精一杯ですよーだ。ま、でも終わったし」

紗紀はぐつと伸びをした。背中<sup>せなか</sup>の辺りでポキッと音がしたような気がした。

二年とちよつと前のあの出来事……あの後、梶野さんが起こした裁判で、過ちに気付いた元隊員達が組織の裏を暴露、見事裁判に勝ち、PEPは完全に消滅した。そして約束通り、梶野さんは戻ってきてくれた。

由雅、紗紀の二人は退院してから、引越した場所で普通に学校に通い、母紗江と幸せな生活を送った。新しい学校の友達もすぐ受け入れてくれ、むしろ二人はその能力のお陰で人気者になった。そして変わった事が一つ。由雅が僅かに残っていた浩之の資料を基に、その頭脳でパイロキネシストの研究をし始めた。最初は見ていただけの紗紀も手伝うようになり、兄妹で毎日研究に励んでいる。梶野さんも三人の近くに引越し、一緒に日常を送っている。

それから、紗紀はあれから何故か由雅の事を「由雅」と呼ばず、ずっと「お兄ちゃん」と呼んでいる。確かに由雅が兄ではあるのだが、双子で同じ年だ。なのに紗紀は「お兄ちゃん」と呼ぶ。あの時助けてもらった事が、一番印象に残っているのかも知れない。紗紀にとって由雅は、兄という頼もしい存在なのだ。

「お兄ちゃん、ほらっ」

紗紀の両手の間に渦巻いた火が燃えていた。最近、紗紀は火のコントロールが上手くなった。但し、よく使い過ぎてふらふらになる。スタミナはかなり少ない。

「上達は良いけどまたやり過ぎるなよ。俺またお前を背負って帰るの嫌だからな？」

「うん、分かってる」

楽しそうに火を操っている紗紀を見て、由雅は静かに笑った。紗紀は何かと由雅に話し掛け、甘えている。由雅はそんな紗紀を可愛がる。

二人の心の間、確かにそこに灯っている。何よりも明るい、世界にたった一つの灯が

(後書き)

後半場面に出てくる国会議事堂の議場なのですが、物語の中では後ろから入ってきてるんですが、議場の出入り口って後ろでしたっけ？間違ってたら教えてください。呼んで頂き有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3602g/>

---

灯～TOMOSIBI～

2010年10月8日15時21分発行